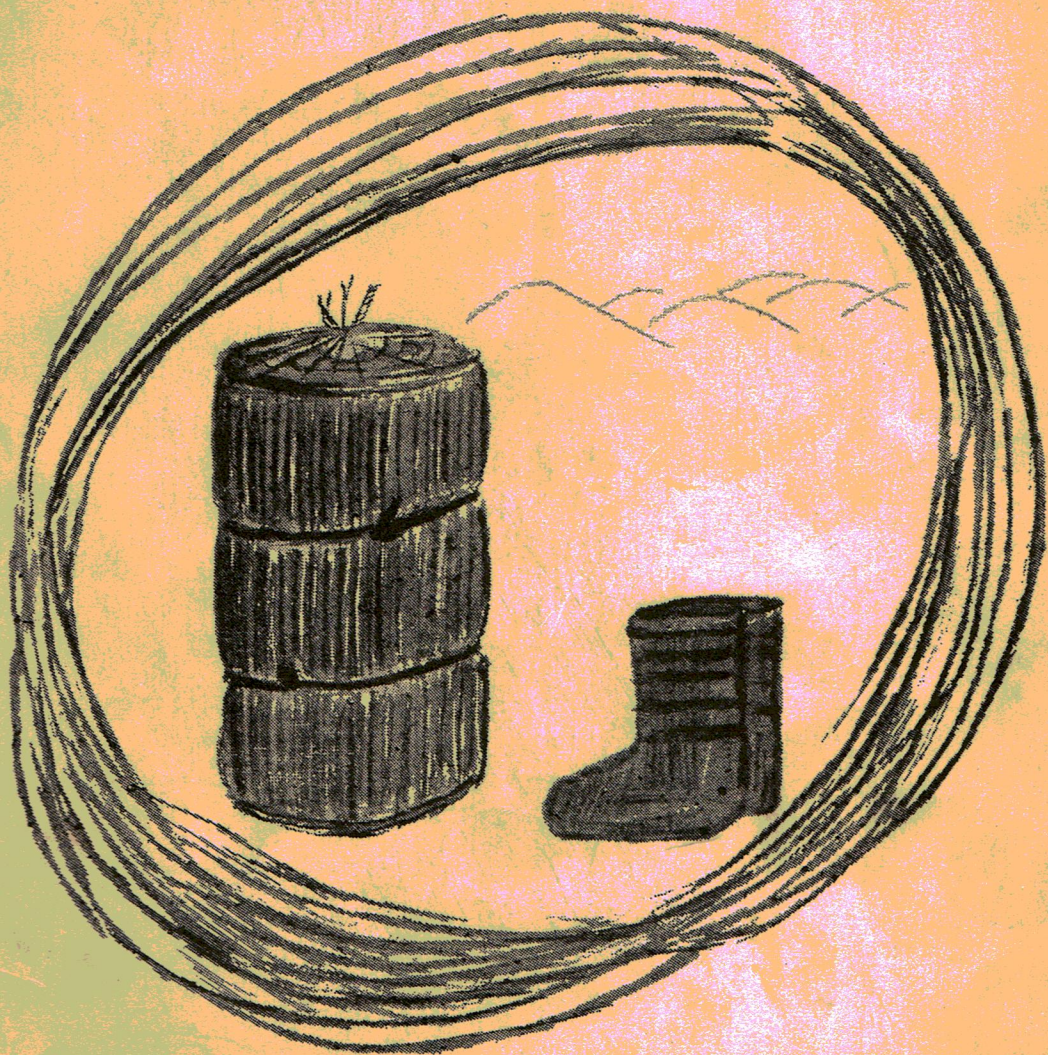


CHAIN

No. 14



An Organ of Fib. Chem. Dept. Dec. '62

目次

健康オー	岩崎 振一郎	- 2 -
初 冬	4 回生 原 単	- 3 -
Life Work	浜村 保次	- 4 -
"げいじゆつの秋"をしのんで	4 回生 寺田 英一	- 5 -
トンネルを抜けて	相宅 省吾	- 9 -
京都めぐり	1 回生 服部 国彦	- 10 -
学生運動と自治会活動	2 回生 逸見 弘	- 12 -
自治会のあり方	3 回生 有松 利雄	- 14 -
DEMO考	1 回生 田淵 康之	- 16 -
小さな小さな世界	研修生 松井 良夫	- 17 -
みんなのみち	まちだせいし	- 18 -
質問コース		- 19 -
一回生諸君への解答	4 回生 木下 泰忠	- 20 -
北の光・南の光	3 回生 竹西 壯一郎	- 21 -
私と語学	1 回生 田辺 勝利	- 23 -
東海村をたづねて	4 回生 平岡 敏郎	- 24 -
パルプ工場から(Ⅱ)	3 回生 金井 政洋	- 26 -
一回生コーナー		- 30 -
文化祭に思う	1 回生 松尾 嘉穂	- 31 -
みなさんも考えて下さい	1 回生 牧田 禪夫	- 33 -
音楽性とテクニック	3 回生 松原 博	- 36 -
現在の疑問	1 回生 鶴野 高資	- 38 -
愚	3 回生 竹西 壯一郎	- 40 -
我樂多	4 回生 町 研 生	- 41 -

「講座廻り実験」	3 回生	有松 利雄	- 42 -
なかにわ			- 43 -
裏切者	1 回生	大橋 武久	- 45 -
織化会の“ファーム”を造ろう	3 回生	金井 政洋	- 49 -
気のおもむくまま	4 回生	芦田 孝雄	- 50 -
<i>Initiation, Propagation, Termination</i>	^{4 回生}	岡田 卓三	- 52 -
「繊維化学教室の生いたちの記」		松本 岳代	- 54 -
編集後記		編集 部	

健康オ一

岩崎 振一郎

大学のあり方とか、自治会のあり方とかについて、いささか書く積りだったが、思わぬ時に病気で寝こんでしまった。寝こんでしまつてつくづく考えることは、人間なによりも「健康オ一」であるということである。若い時には、元気にまかせて、「健康オ一」であるということは理くつとして分かつていても、体験としては分かりにくいものである。

とにかく「健康」を大切にすることが、すべての根本である。「健康オ一」。これがこのたびの感想である。(37. 12. 3.)

初 冬

4 回 生 原 隼

愛宕の陵線に燃え切った残光が走ると 影蒔い紅葉を硝子と透いて

無表情な東風がよぎる度に

それが偏光板の光を壊って、曇らせ、輪郭を失わせる。

何時よりか飽かず眺めていると、覚えず自分が大樹にしがみついていた
その葉が舞い降りて感情の吐息を吹きつけるのではないかと、疑っていた
それは枯葉ではなかった。

青春の杖い恥らいに精一杯映えて、無表情な大樹のゆさぶりにじっと耐え
ているいじらしさに、一人腹立ちを覚えて平手で勢いよく打つと

その大樹は観念したようにふてっくされて黙ってしまう。

ほっとして今一度見上げると、それは妙に淋しさにとりつかれた風で
どうしようもなく戸惑った挙句、じつとうなだれていた。

「馬鹿な奴だ。あんな目に合わされてもまだ-----。」

情無い友人に背かれた人の心を 異様な腹立ちから嘲ってしまった。

初冬の厳しい自然の造影が 孤獨にふてっくされて女心を嘲う。

一人の男の背に泌みつく

気まぐれな男の冷やゝかさが、臆病なその男にも抬げて黙らせてしまう

灰色の嵐に包まれた、情無い友人に背かれた人の心が

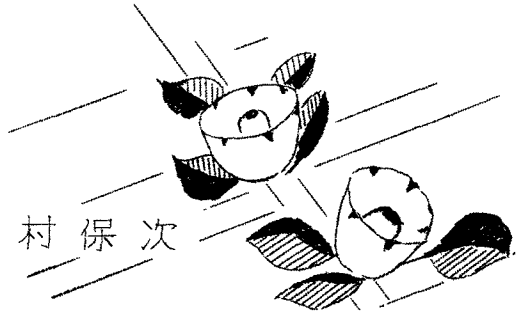
愛憎に心尽きた悔悟者の空洞まで吹き抜けて 女心を嘲う罔太さを
凝結させてしまった。

愛宕の陵線に冷え切った残光が走ると、初冬の厳しい追求に

苦い過去への重責を怖れて、私は孤獨で報いる外に
背かれた人への懺悔を知らない。

LIFE WORK

浜村保次



先日チェーンの編集員の人が見えて、既に退官している私に、何か研究の思い出を書いて呉れとの事で、原稿書きはいやだが、気持はうれしいので、承諾した。今日は又茶道部から、文化祭の茶室に掛ける短冊に何かかけと言って呉れるし、謡曲部では恒例の京女との合同能樂会に出演と決められている。何か春風が吹きぬけて行くように思えてならない。と言うのも、退官後の研究の連絡に一寸つづけて学校へ出たら「退職したものが未練たらしく学校へ出入りするな」と、さる筋からきついお達しを受けて、研究の継続にも不自由し又、寒々としたものを感じている折からでもあろう。世の中はなかなか面白いものである。話がついそれて申わけない。

さて *art is long, time is fleeting* という言葉があるが、耳を喰って見ると、この言葉の実感、ギリギリに迫ってくる。若い時はまだまだ、先があるわいと思って来たが、10年20年の短い事！時の大切さが身にしみる。振り返って見ると、若い頃は先が見えず、色気が多過ぎて、何にでも手を出し、兎の糞みたいな、ころころと小さくまとまったような仕事ばかりで過ぎてしまった。しかし真実を追究する気持ちだけは、一貫していたと見えて、二十数年前、この学校に来たときにかつと思つた「蚕は何故桑ばかり喰べるのか」と言う愚にもつかない、問題をずっとだいて温めて来たら、今になって、「ひよっこ」が生れて来て、これが私の *life work* と言う事になってしまった。合成化学や有機化学を担当していた私は、このような問題に時間を割く事に、自分自身で可なり抵抗を感じた。しかし生物学と化学の中間の谷間に置かれているこの問題を解決するのは、化学をやっている自分より他にないと言うような使命感みたいなものに捉えられていたらしいのである。

Life work と言うものは、このようなもので、幼稚園の子供でも考えるような問題（この中には根本的なものが含まれているが）を何かの機会にと考えて、忘れられず一生をかけると言う場合が多いのである。そしてこの内には底知れぬ大きいものが潜んでいる。それだけに研究も容易でなく、昔から言う運と鈍と根でねばり抜く事が大切で、賢さがあると出来ないのであ

る。それだから、其の間には

枯れ菊の氷雨にぬるゝ姿かな。

と、自分のあわれな姿に一滴の涙をそそぐ場面を幾度か越えねばならない。

しかし「ひよっこ」の生れた時の喜びは大変なものである。たとえ浦島太郎みたいにかたを削いたとたんに白髪の爺となっても、夢は死ぬまで垢がってゆくであろう。Life work と言うものは又、真実を見つめる愚直ささえ失わなければ、たとえ兎の糞見たいで、一つ一つが何のかかわりもないかに見える仕事も、最後には丁度囲碁の捨て石みたいに生きてきて大きくまとまることもある。初めから、これは自分のLife work にするのだときらんと計画を立ててやった場合は案外小さな仕事しか出来ないものである。と言うのは、計画は自分の経験と、小さい頭脳の範囲を出ないからで、天衣無縫の大きさは望めない。このように書いてくると、何だか私が大変な仕事でもしたように思い上がっているみたいで後味が悪いが、これは皆さんが既に知っている通りだから、弁解はしない。Life work にも大小様々あってよい筈である。其の大小にかかわらず一生かけた仕事には、いづれも共通したものが見える。それをお伝えしたまでである。而して思うには、皆が皆何等かLife work となるべきものを持ちたいと言うことである。専門的な事でもよく、又人生とは何ぞやの問題でもよい。真実を見つめる愚直さがあればよいのである。人の出入を気にするような暇もない程、充実している筈である。

昭和37.11.26.

(筆者は前繊維学部長)

“げいじゅつの秋”をしのんで

4回生 寺田英一

暦の上ではまだ秋であるが、十二月ともなれば寒い北風が身にしみりし、更に京都特有の底冷えが骨の髄まで浸み渡る。大通りの街路樹もひとときの林みもなく、一枚一枚と葉をはがれていくようで何となくさみしい。運動の秋、読書の秋、芸術の秋も過ぎ去り、我々に残されているのは食欲の秋くらいのものであろう。

食欲の秋と言えど、生協の×シ類が一率5円値上げになったのは全く心外である。その値上げの理由は人件費とか、特送米のせいにしてしているようだが

従来のもゝでも他の大学に比べて安くはないのだから、赤字にならぬ限り値上げるする必要はない。営利を目的としない組合という観点から云えば、世間一般の物価の値上げに便乗するのは全くけしからんことである。自治会も学外のデモやストライキにはばかり気を取られなくて、こういう方面にも気を配ってもらいたいものである。食欲の秋なんて言葉がつい出て来たので、つい横直にそれてしまったが、申し訳ない。

芸術の秋といえば、最近面白い話題が多い。真物・贋物騒動がそれである。“永仁の壺”にまつわる事件は新聞にも派手に報道されたし、まだ記憶に残っていることと思う。ごく最近では藤山愛一郎氏所有のルノワールの作品“少女像”の例がある。

この作品に関しては少々エピソードがある。

この作品は川崎市のデパートで開かれていた朝日新聞主催の西洋美術展で陳列中に盗まれたもので、和製ルパンの仕業ではないかなどと勝手な臆測がなされたものだが、その後いくら経っても発見されなかった。藤山氏も作品の海外流出を恐れて、その作品を西洋美術館へ寄附する旨を新聞に発表した。ところがそれが賊の良心？に届いたのかどうか分からないが、向もなく東京駅でトラックの荷台から偶然に発見された。

これで時価何百万円もする名作がもとに戻ったのだから happy end のはずなのだが、そうはいかなかった。藤山さんはいやしくも国会議員である。約束通り早急西洋美術館へ寄贈した。無事に作品も西洋美術館に納り、“寄贈願”という書類の署名捺印も了った。ところがたまたま富永館長が画面の汚れを払っていると、どうもルノワールの筆跡らしくない点が見付った。さあこうなると周り一面ジマーナリズムに取り囲われている藤山さんのこと、見る向にあれこれ尾ひれを付けられて新聞雑誌に報道された。ひどいものになると詐欺師の如くに書いている週刊紙もあったらしい。しかし文芸春秋の11月号に書いている藤山さんの話によると、自分では真物であると信じていたようで、名譽回復の為に徹底的に真贋を調べるつもりらしい。いずれにしてもその後どのように結論されたのかは知らないが、もしこの絵が盗まれていなかったならば、贋物ではないかなどと疑われることもなく、藤山愛一郎氏の秘蔵物となっていたに違いない。

元来美術工芸品には贋物が付きものだが、我々凡人から見れば、贋物の方が本物より立派な場合だって往々にして有り得るのである。否専門家の眼で観てもそういう場合は有り得る。真物が贋物と根本的に異なる点は真物はそれ

が創作であるということである。見掛けが良いとか、立派であるとかいうことではない。創作であるという所に芸術作品としての価格もあるわけである。思うに、美術工芸品の真贋を鑑定するのは大変難しい。紙幣の鑑定なら、いくら精巧なものでも、よく注意して比較して双れば我々にも出来そうだが（もっとも一万円札ともなれば、ほとんどお目に掛ることはないから保障の限りではない）真物が唯一つしかない芸術作品では、よほどその作者に精通していないと鑑定出来るものではない。下手をすると真物がいくつも現れたりし兼ねない。しかし我々貧乏人から云えば、何百万、時には何千万円もする作品の複製が比較的安価で手に入れられるのは全く有難いことである。贋物万才である。

近頃は専ら抽象画がもてはやされている様だが、全くなげかわしいことである。猫もシマクシも抽象画である。まだ一人歩きも出来ない様な赤ん坊から、いい年をした大人まで抽象画である。それが全て芸術作品とくるからやり切れない。二三年前のことだと思うが、“ゆたかちゃん”だったか何だったか忘れたが三才の子供の描いた絵の個展が高島屋で開催されたことがある。好奇心も手伝って見に行ったが、押すな押すなの人の波で、大盛況であった。「なる程立派な抽象画である。色彩も豊富ですばらしいし、その伸び伸びとした筆跡は常人の出来るものではない」などというのが自休インテリ達の批評であった。なるほど最近の二科展や日展にまでも出品される抽象画に比べて何ら遜色はない。それどころが三才にしてこんなものが描けるのだから大したものである。もっとも大した共通点というのはいづれも“何のことが解らない”ということである。

抽象画の先駆者といえば、パブロ・ピカソであることは異論のない所である。ところでピカソは小さい時からあのような抽象画を描いていたのではない。父親が美術学校の教師をしていた関係上、幼い頃からすぐれた芸術作品に親しんで来た。その当時(1890年代)は写実主義の時代でもあり、ルノアールなどの印象派が全盛を誇っていた時代でもあった。従ってピカソも当時は写実主義のいわゆる古典派に属する絵を描いていた。しかもそのオーソドックスな古典派の作品で板群の腕前を見せていた。彼の14才の頃の作品に“コスタレス氏の肖像”というのがあるが、その作風は14才の少年の作品とはとても考えられないものがある。この作品は河出書房の現代世界美術全集の中にも掲載されているから、興味ある方は見て頂きたい。

ピカソが何如 *abstract* の方へ転向したかは、我々凡人の掌り知らぬ所であるが、彼が *abstract* の先駆者であり、現代に大きい影響をもたらした天才であることには間違いない。もちろん彼の作品の全てが傑作であるわけではない。駄作も沢山あるにちがいない。しかし彼が偉大な天才であり、有名である故に駄作も一般には、吾輩門家の面でもさえも傑作として取扱われ、途方もない値段がつけられていることもある。これが抽象画の場合には尚更である。

話は元に戻るが、三才の幼児が描いた絵が芸術であるなどというのは芸術に対する冒瀆である。本人にしてみれば落書きのつもりか、それともおやじから筆と絵具を与えられたので何とはなしに紙の上をこすっているのかも知れない。“あっ早く外へ遊びに行きたいなあ”と思いをがらいやいや筆を持っていたのかも知れない。或いはたまたま服のそでについた絵具が紙の上を走ったのかも知れない。こうして出来上がった色付きの紙をいやしくも抽象画などというのはナンセンスである。それより本人の“おねしょ”のあとを切り取ったものの方が遙かに芸術的である。

小さな可愛い子供の場合ならまだ罪もないが、一人前の若者や、いい年をして頭のはげたおやじが、手足や身体に炭や絵具を塗りたくって、大きな広げた紙の上をのたうり廻り、そのばかどかい汚れた紙が芸術的作品とは全く狂気の沙汰である。つい最近テレビで拝見させられたのだが、スタジオ一面を覆うような大きなアルミ板を貼った衝立に、コマンチ族やアパッチが顔負けするような格好の二人の若者（六本木族という連中である）が大きなマサカリを振りかざして、奇声を発しながらその大きなアルミ板を切りまくる-----これなんか全くの間違いである。更にこれを芸術などと放言するに至っては何をか言わんやである。

これらはいづれも行動派と言うんだそうである。

現代人はとにかく新しい刺激を求めたがる傾向が強い。それをマスコミがいろいろ場合に利用して、このような事態になったのであろうが、この様な状態がいつ迄も続くとは考えられない。少くともそう考えたくはない。人間はそれ程馬鹿ではないのだから、中世の終りにルネッサンスがあったように、やはり古典的な方向へと移行していくのではないだろうか。丁史はまたくり返すという有名な言葉もある。

以上は筆者個人の芸術観が書かせたもので、本人は勿論芸術家でも何でもない。唯多少絵に興味がある“有能なる技術者の卵”である。もっとも無精卵であるかも知れない。

トンネルを抜けて

相宅省吾

十一月の初め福井大学で繊維学会があつた。私の研究室も全員これに参加する事にし特急白鳥に乗った。実り豊かな近江の野を走り紅葉する戦ヶ岳の峠をこえ越前の国に入った。しばらくすると最近開通した日本一長い北陸トンネルに入って行った。今迄はあえぎあえぎ迂回して行った北陸の難所を僅か十五六分の快適なるエンジンの響を残して白鳥は通り抜け目的の福井の町に滑る様に入った。

此のトンネル内で色々な事を考えた。今志を同じくする人達と多くの成果を携えて談笑の内に此所を通って行く。しかしこれまでは思えば長い長い暗黒の歲月であつた。その中で私は多くのさえぎられて身動も出来なくなった時、無我夢中で方向も知らず鵲踏を打ち下していた。

多くの試は虚しい音と嵩い火花を散らすだけで闇に消え去ってしまった。

学校卒業以来二十年、国家の栄光を憂みて情熱を燃やして技術者として参加した大平洋戦争は当然の帰結とは言いながら無残な敗北に終り悄然と学校に戻って来た。桜田先生や先輩達に暖く迎えて頂きしばらく疲をやすめた。

敗戦の苦しい時であつた。日本中は混迷に陥っていた。頼まれては私立中学校の教壇に立った事もあつた。当時の私の希望は旧制の高等学校の教師になる事と工業をやる事であつた。その後今この学校の前身京都繊維専門学校の教師になつたのはこれから一年程遡っていた。

兵隊帰りの老若学生達と芋をかじり、炭をいこして化学の実験をしたのも楽しい思出の一つである。此様に教師としての微温湯の安逸をむさぼっている時に学制改革の地滑がやって来た。一瞬の内に土深く埋まり体の自由を失ってしまった。人々の帰ってしまった実験室でたゞ一人ひそかにブックマン寒暖計を眺めているうちに多くの歲月は過ぎて行った。昼は二、三人の卒論生とあちらこちら手探りで部厚い壁にノミを打続けた。ある時はかすかな光を認めた。この光を頼りにそして多くの縁ある人達に助けられて互にいたわりながら進んで行った。ある日忽然と光輝やく花咲き乱れる高原に出て来た。何日破れることも知れぬ壁が破れたのだ。誠に有難い経験をした。そして今確かにトンネルは抜けたのだ。そして眼の前には玄々とした未開の天

野が広がっている。そして一人でも多くの人達に此の景観を楽しんで充分なる収穫を得て頂きたいと思う。

現在私は茫然として此の美しい高原の一角にたづんでいる。そして争なき風の声が聞いている。トンネルをもっと広げ汽車を通せ。そして多くの後から来る人に便宜を与えよ。高原をくまなく歩き廻ってそして最も美しい岡に天幕を張り高原の主人となれ。

又別の声がする。君は漂泊の魂を失ったのか、又技術者として穴のあいたトンネルに未だ執着があるのか。

更に厳しい声が聞えて来る。高原の向いは人の知らぬ氷雪の山脈が幾重にも重なり合っている。お前の人生の門出に一書を与えた人達はすでに恐しい氷河に立向っている。お前は戦う事を忘れたのか。

今私は確かに疲れている。明るい光に眩惑されて正しい判断がつかぬ。今、軽はずみに動いて若し今方向を誤ったならば多くの人々に測り知れぬ損失を与える事になるだろう。

今度又し振りにある会談に出た。方向を誤った老醜をさらす人々を見て自戒する事、誠に切実なものがある。

福井の学会が終って研究室の人達は皆信州に出掛けたが私は時間の都合で越前、美濃の山を越えた。白山、白川、白鳥等名の如く紅葉の氷の美しい所であった。今は清浄なる白一色の世界となっているであろう。

京 都 め ぐ り

1 回 生 服 部 国 彦

京都の学校へ行っているのに京都はどこも知らなかった。学校と家との間を単調に往復している毎日だった。先日親類の人に京都へ毎日通っているのなら京都を一度案内してほしいと言われて困った。大阪に生れて以来住んでいるのに大阪をあまり知らないということを見ると別に不思議はないのだが大阪にはたいして名所とか史蹟とか言うものがない。それに比べて京都は觀老都市だ。というわけで友達と二人で京都をまわってみようということになった。實際清水寺以外どこも知らなかったのでとりあえず有名なところからまわることにした。観光バスなんかで行くのは面白くないし町の名も覚えないので地図をもって市電や市バスで行くことにした。さいわい近体のときにもらったバスの切符があった。まず最初は平安神宮に向った。三条で降りて歩いたのだが鳥居は予想外に大きかった。手前の橋に立ってずっと向うの朱

塗りの応天門をながめると気分はそう快になる。明治時代に平安遷都1100年を記念して平安京大内裏の $\frac{1}{5}$ の規模で創建したものだが観光用にこれだけのものを作ったのだから明治政府も思い切った事をしたものだ。応天門といえば受験のさいに詰めこんだ知識がおぼろげながら頭をもたげてくる。応天門の火災をめぐって伴氏を良房が政界から退けた事件だった。しかしこの門の前に立ってその面影をしのぶことはできなかつた。あまりけばけばしすぎる。この門を入った正面の大極殿とその左右両端にある楼閣は東を蒼楼、西を白虎と呼ぶがその彩色は背景の木々の緑と対称的であり均整がとれていて美しかった。が観光客が多すぎていやな感じだった。その背後にある神苑は大きな回遊式庭園となっていて四国の栗林公園などに似ている。拝観料50円のせいかととても静かで人影はほとんどみられなかつた。春の桜並木は橋殿の優美な姿と配合されて素晴らしいだろう。次は市電に乗って銀閣寺へ行った。京都の市電は観光客のためにあるようなものでこういうときに便利だ。古ぼけた山荘と小さな池。義政はこれを作るのにだいが無理をしたのだろう。銀箔は一枚もはるることができなかつた。室町幕府の衰微を象徴しているようだった。東求堂にみられる「わび」「さび」の精神が分るような気がする。こんどは植物園に向つた。北大路橋というところで降りて加茂川ぞいに歩いた。京都の川はきれいだが、大工場があまりないせいだろうが大阪の川とは比べものにならない。黒くよどんだ淀川などを見ると全くいやになる。ぼくが大阪の市長だったら“川をきれいにする運動”をするのだが。植物園の中は京都に似あわず近代的な感覚があふれていた。丸い形の温室は東洋一のりっぱなものだ。この中に入るには入園料のほかに又50円取られるしかけになっている。近代的なやり方だ。ともかく清々しい日光のもとに七色の花が咲き乱れる園内は市民の憩の場に違いない。ここを出てから烏丸車庫までいって市電に乗つてから定期を落した事に気づいた。あわてて引き返して芝生の上を必死でさがしていたら女子高生のお四人連れが拾っていて後から追いかけてきて手渡してくれた。ほっとするやらうれしいやらで、お礼に「近くでお茶でも飲みませんか」とでも言いたいところだがやめた。ふところ具合がよくなかつた。最後は金閣寺。ちようど夕日をわびて輝いていてそれが池の水にうつり本名を舍利殿という三層の楼閣が鮮やかに浮び上っていた。昭和30年10月にできたにせものだが本物はこんなにピカピカしていただろうか。にせものが多いせの中だから仕方がない。とにかく夕日に輝いているところは一番印象に残っている。池は銀閣寺よりも大きいようで全体的に開放的な感じがした。方々回つたのに最初考えていた程外人と出会わなかつたし話をするチャンス

がつかめなかったのは残念であった。

学生運動と自治会活動

2 回 生 逸 見 弘

12月3日C₁C₂C₃C₄の合同クラス討議が「大管法」「学内民主化」というテーマのもとに開かれたが(残念ながらC₄回生の出席はなかった)C₁C₂回生の考え方とC₃回生の考え方が根本的に違っていた点に注目しよう。特に前自治会執行部分部氏、有松氏の考え方と現在の自治会執行部の根本的違いについてのべてゆきたいと思う。自治会活動は学園内における学生の権利、更にそれを発展させて社会的権利、要求を守る事、及び学生自治への認識とそれに参加する事を意味した組織である(団体でない事に注意していただきたい)前自治会委員長の根本的な自治会活動およびその認識に対する誤りは、学生の観念性に注目して思想運動に不当な比重をかけ政治活動はやってもやらなくてもよいという程度にしか考えなかった点にある。その上もっと根本的に自治会活動に対するはっきりした定義、裏づけを持っていたのであろうか。特に「大管法」に対する彼の態度がまさにその考え方であろう。「大管法」それ自体にだけ考え分析し、その厂的背景あるいは社会情勢を分析する事なく部分的には賛成とか言った態度を取りその中に自己をまぎれさせてしまい自分を正当化しようとした。現実と与えられた主観的、客観的條件を無視し又その厂的背景を無視する点に於て学生運動そのものを否定した事になる。こういう学生運動の否定についてはもっと徹底的に追及、批判されてもよいであろう。

もっとそれ以前の問題として前自治会執行部のおかした誤りについて批判し、これからの自治会の取るべき態度について考えていきたいと思う。まずオーの誤りは自治会を「啓蒙機関」としか考えていなかった点である。こういう考えの下に有松氏の言う「学生の意識の高ようを待たせよ」とあるいは「学生全体が望む事以外は何もしてはいけない」というまったく学生運動そのものを無視した非現実的な考え方に陥る、学生の多くがGirl friendを望んでいるからといって自治会がどこかの女子大の女の子を世話しなければならないと言いかねない。そして学生運動全体にブレーキをかけ行動を通じて各人が変革出来るという意識を無視してしまったことで自からセクト的限界を作った。そして現在与えられているものを最上のものと考えその限界内

でしか行動できないような錯覚におちいり、いたずらに支配者階級の思うつぽにおちいっていたのである。彼らに言わせれば法律のわく内でありさえすれば戦争でも容認するし、政府の政策であればどのようなものであろうと認めると言うことになりかねない。权力闘争(残念ながら今まで日本にそのような伝統がない為一般市民の反感を買っているが)においてそのような弱気な態度では絶対に勝利を得られないし、それどころかかえって支配者階級をようごした事になる。フランス、ベルギー、その他の国々みるがいい、彼らはバリケードをきずき、流血事件まで起して权力にたいこうしているではないか、日本の学生運動の「史」レッドパーズ闘争、「砂川闘争」、等々をみてもまさにその通りである。

又更に自治会をサービス機関と考えていたことである。前執行部は学生の要求することだけすればよいという立場に立ち自治会活動を自然発生的に放置し支配者階級からのイデオロギー攻勢の前に屈服した理論をうしろだてに活動してきたのである。つまり支配者階級は保守的アカデミッシャンとむすびつき、学生の本分は勉強する事であるが、教育は産業発展に役立つ人間を育てなければならぬ等々のイデオロギーと前面に押し出してくきた、そして常に戦争でもつとも痛手を受けるとすれば革新的批判的行動的学生の目を政治からそらそうとした、彼らはそのイデオロギー攻勢の前に屈服し学生自治会の理念の中から政治的役割をまっさつしてしまつた。

具体的に前自治会をみればわかる通り、何もしなかつたというのが本当である、彼らの主張した「学生の啓蒙」さえあるいは事実を認識さす活動さえしなかつた。自分はトウ写板とにらめっこでやったと自己満足しているだけである、そしていたずらに貴重な時間を無駄な目標のない浪費につぶしたというのが事実である。

それではこれからの自治会はどう進むべきであろうか。学内におけるイデオロギー闘争を徹底的に展開させ、ブルジョア平和主義にこり固つた3回生4回生を徹底的にうちめし、又反面政治的行動に積極的に参加し、徹底したクラス討議を通じて学生の社会的政治的視野を広め現在の自分を認識さすという点まで高める事が必要であろう。そういう意味で自治会が政治活動を中心にして積極的運動を展開するなら学内における学生の思想形成、変革にも役立つであろう事を確信する。

自治会のあり方

3 回 生 有 松 利 雄

これからいおうとすることは、この *chain* に於てよりも新聞でその一部をかりて意見・主張を交換する方がより適切であると思うが、H君の希望もあり、又この *chain* 上で意見をかわしあうことも決して無意味なことではないと思うので、自治会のあり方というものについて僕の意見を述べてみたい。自治会というものがどのような使命をになっているかということを考えてみるのに、これは実にむづかしいことである。

ところが自治会活動が政治運動のみでよいだろうか。年中行事のみでよからうか。自治会費を集めてそれを各クラブに分配するだけでよいだろうか。……等々。そのどれも良くない。これらの総合であるべきだと考える。これは別に誰しも異存はないと思う。問題は、もし学生が「自治会活動は年中行事のみでよい」といった場合だ。この時これを無視して、自治会は政治活動をもすべきであるからといって積極的に政治活動をするか或は先ずは学生に対し自治会活動は年中行事のみにおわるべきものでないことを啓蒙し、学生の意向を変えてから政治活動を行うかどちらがよいかということである。僕は後者をとる。これについて僕が半年位前紙片に書きつけたものがあったのでこれをそのままうつつしてみよう。

××自治会よサービス機関であれ××

自治会執行部のおえら方は「自治会はサービス機関ではない」とか何とかえらいきばっておられるが、自治会はやはり学生の代表、学生のイニシアティブをとるものとして存在するのであって、社会思想クラブぐははないはずだ。社会思想クラブなら他人に迷惑を及ぼさなければ何をしても自由であるが、自治会ともなればそうはいかぬ。レコードコンサート、スポーツ用具貸出、その他福祉厚生関係或は年中行事のことから大学管理問題、憲法改訂問題に至るまで全て一般学生へのサービスである。例えば一学生或は少数の学生が大学管理問題に反対しようとしていると仮定する。しかしその力は余りにも微々たるものでどうにもならない。そして他にそういう考えをもったものが多数おるがどうしてもまとまりにくい。そういう時に自治会がそれらの力をまとめイニシアティブをとっていくのであって、全く一般学生(即ち自治会員)

へのサービスではないか。今の自治会のように一般学生がその道を見つめるとにかかわらずただただ何々運動に参加しようとし、又デモに参加しようとして、本当に自治会といえるのか。一般学生がついてこなければ(即ちサービスではなく自分勝手な行動をとるなら)それは自治会ではなく社会思想クラブ(とでも言おうか、ただ単なるクラブ活動)にすぎない。又自治会は「一般学生の方から希望のあることだけをする」と言うこと他「一般学生の気付かない所にすばやく気づきそれをPRする」ことである。例えば憲法改訂が悪いと仮定する。ところが一般学生は割に無関心でこれに気付かないとする。その際自治会はいち早くこれを察し一般学生にPRすることである。しっかりPRすることである。(それを怠りしてPRもせずとにかく憲法改訂は悪いのだから反対運動に参加するデモに参加するというのが今の自治会)しっかりPRした上で学生の納得を得る。(真に憲法改訂が悪ければ学生の納得どころか、学生の中から反対運動が盛り上がってくるはずである)。それから初めて反対運動参加とかデモ参加とかの実行段階に移せばよい。この「一般学生の気付かないところにすばやく気づきそれをPRすること」も、これもまた一般学生へのサービスである。自治会はサービスにはじまりサービスにおわれよ、サービスからはなれることは社会思想クラブなり何なりの一つのクラブに下落することだ。

文章がところどころおかしい点もあるし、事実を誤っているところもあろう。又現在の自治会がこの文中に出てくる様な非難にあたらぬ点も多々ある。たゞ僕のいうところの自治会はサービス機関であるという主張がどういう意味がわかっていたらければよい。それから自治会活動を実際に実行する場合、自から限界がある。学生は自治会役員であると同時に国民であるということである。例えば自治会で「×日の衆議院議員選挙では誰々に投票すべし、本自治会員は全員これに従うべし」と決めても自治会会員に対してそれを強制することはできない。それから自治会会員が毎年毎年かわっていくことも一つの特徴であると共に一つの限界でもある。

これらの問題(自治会のあり方)は非常にむづかしい。僕もいろいろ考えてきたが、なかなかすっきりと割りきれぬようなものではない。又自分自身の考え方も時とともに変わっていく。今後も会あることにいや概念をとらえては色々と考えていきたいと思う。

DEMO考

1 回 生 田 淵 康 之

終戦後連合国によって日本に移植復活強化された民主的諸制度を保守反動勢力に対抗して運営維持する能力を持つ段階に労働者階級が到達していないのが反動化の要因である。労働者階級の政治的未成熟から選挙双をもつていながら国会の過半数を占めることができず、国会の現実が資本家階級本位に拘わっている。ここに大規模なデモ・ストライキなどの手段に訴えて政府に圧力を加えたりすることが労働者学生にとっての政治的手段と考えられるようになり保守革新の対立が激化した。この事態を引き起こしたのは国民の多数を占める労働者階級の責任である。選挙においては全の選挙人の投票の価値は平等でなければならぬから政治意識の低い労働者層の一票もその価値の平等性になら異なつた所はない。したがって保守勢力は全国民によって選ばれたと看做すことに問題はない。憲法改正反対・学内民主化を叫び、他方では憲法によって全国民を代表する国会の憲法の範囲内での立法を少数者の集団行動で阻止しようとするのは予盾である。(革新勢力の支持率は保守勢力のそれらに比べてまだ低い)結局それは「多数決原理の否定→民主主義の否定→憲法の否定」となる。(多数決原理と民主主義はそれぞれ民主主義と憲法の本質的部分である。)現在学生運動はデモ至上主義を信奉しているが戦術的な意義ではなくて、その目標とする観点からは手段と目標が調和するかどうかは疑問である。自己の意志をデモによって表現するのは憲法で認められている。しかし過半数の国民の支持を受けた立法を少数者が左右することは論理上ありえない。それならばデモの意義は政治的無関心層や政治的に未熟な労働者層にアピールすることにつきてるのであるが、その効果もマイナスかプラスか明らかでない。デモにエネルギーの発散という面が多分にあるのを認めざるをえない、そして闘争の手段としてはあまりに不経済ではなかつたか色々な面を考へて)労働者階級の成長を期待し少しでもそれを助長する以外に方法はないであろう。

小さな小さな世界

研修生 松井良夫

これから小さい小さい世界の話をしましょう。先ず皆さんをその世界に、案内しましょう。片目を閉じてごらんください。そして開いている方の目で、この顕微鏡をのぞいてごらんください。そうです、これが、俗に“micro的”といわれる微小な世界です。でも私は敢えて“微”という言葉は使わぬことにします。

さて、皆さんは、小さい小さい世界にやってきました。決してガリバーの物語に出てくる様なお伽の国ではありません。そこには全く違った世界が開いています。凡そ人間が想像もつかない世界が、現実にもそこにあるのです。

そうです。何十分の一、否、何百分の一の世界なのです。私は、その世界をとおして、現在あるもの、私のまわりのことを考えるのが好きです。

考えてごらんください。あの小さな世界も生きているのです。そこには、夢がある。芸術がある。それらを通して、現実の世界をふりかえる。愉快ではありませんか。

その小さな世界を通して、真理を見極める。そこには、スリルもあり、サスペンスもある。ニヒリズムもあればロマンティシズムもある。そしてそれらすべてが、何ものにもとがめられることなく、調和を保っている。全く静かな世界です。

科学的にそのメカニズムを探究することは、とりもなおさずその本体をつきとめることであります。でも、私の案内している世界は、そんなものじゃないのです。そこには生えた、否、生えている生命なるもの。それがすべてこの現実にあるもの、あるべきものの現れなのです。それは、オペーリンの云う生命にあらず、もっと広いもの、すなわち、生物のみの特権ではないのです。

その生命は純粋であり誠実であります。オーに誤魔化しがききません。しかもその上に尚、人間の限界を越えた厳しい規則があります。それは、絶大な権力をもってその世界を支配しています。現実の世界にある私達ごさえその権力にはかないません。すべてあるべきもののみもつ権利です。

さて、現実の世界に帰りましょう。なに、帰りたくないって。いや帰らねばなりません。現実の世界の権利はあなた自身もっているのです。あなた自身が、現実の“小さな小さな世界”であり、そこであなたには進んでいくのです。

みんなのみち

まちだせいし

すすめのこ そののけそのけ お馬が通る 一茶

のんびりした昔の田園風景である。しかし、道路における交通問題としてちよっと考えさせられる要素が含まれている。それはこの句を読む人が、威勢のよい馬の姿をまず想像して、道を邪魔する雀が払いのけられるのを考えるか、あるいは、道にあそぶすすめのこの様子をまず想像して、この平和をおびやかす馬の足並を思うか、によって微妙な相違が生れる。

われわれが道を歩いている時に、車の通行は実に迷惑に考える。大型のバスやダンパーカーはもちろん、小型のオートバイまで、道一ぱいに高速度に通り抜かれると、人道のない処では全く命がけの思いがする。車上の人間に大いにふんがいを感ずる。

ところが、自分が一たん車上の人となると、今度は歩行者が実に邪魔に見える。横断歩道以外で平気で道を横切り、車の前後を往き来されては危く大いにふんがいすることになる。

立場が変わると、全く反対の考えに立つから実に奇妙である。ところが、これが現実の人間の思想である。

物事は自分を中心として考え勝ちであることをこの際反省させられる。

道の通行を安全にし、秩序だてるためには、そこに一定の規則が必要となる。いろいろな制限もできる。その制限に従うことによって自身の安全と自由が保たれる。天下の大道は自由に通行するのが原則である。大きく言えば憲法で保証された権利である。それを規則で制限するのはけしからぬと言える。同構されるのはお馬か、すすめのこか。

このような議論はほかの所でもよく聞かれる。憲法で認められたストやデモを制限するのはけしからぬと言う議論である。憲法も法律も、もともと人間や社会の秩序を保ち、安全と自由を確保するためにつくられたルールである。一方的に自分の権利を主張する人達は他人の自由を無視していることが多い。力の弱い者は団結の力で身を守る。ストやデモは団結を表示する方法である。しかし、その行きすぎによって一般の庶民が迷惑することになれば、どちらがすすめのこでどちらがお馬なのであろうか。

お互いに相手の立場を尊重し、相手の権利を認める所に自分の自由が確保されるのである。相手預って自己の自由であり権利である。これをむぐかし

く言うと絶対否定的自己同一の世界とある哲学者は呼んでいる。

人間社会が自由を保つためには一定のルールが必要であり、ルールに従つてこそ真の自由がある。他人の自由が自分の自由となるわけである。自然の法則を無視して真の自由は有り得ない。自分の義務を自覚して初めて権利が保たれる。自由は責任を伴うとはこのことである。

学園は学生の勉強の場であり、教官の研究の場であり、事務取員の取場でもある。相互の立場を尊重する所に平和と秩序が生れる。

ところで、相互の立場は全く対等で同一権利であっても、平和と安全をまもるためには更に秩序のあり方が問題とされる。歩行者と車上の人とは同一の権利である。けれども相互の安全には秩序が要求される。鉄道の踏切りで一旦停車する人が、これはけしからんことで急行列車こそ一旦停車すべきであると言ったらどうだろう。自然の法則を無視した議論として人は笑うであろう。こんな妙な議論はしかしよく見かける。小林一茶も

お馬よ そこのけそこのけ すずめのこが通る

とは言わない。このへんの争権をよく考えてみる必要がある。

俳句をこんなた解釈するのは少しおかしいかも知れない。のんびりと自然の風物を詠った句として、静かな心境で鑑賞できるような世相であり度いものである。ユーモラスな俳句はそのまま受け取って笑って読みたいものと考ええる。

質問コース

1 回生より教職員・聴・研修生各氏ならびに上級生諸君に

同じ繊維学生でありながら、我々は週に2日しか繊維化教室に入らない。又本科の特長かもしれないが、各学年、各研究室のセクト主義におおわれている。故に繊維化学科のことや各回生のやっていることもはっきりしない。我々はしりたいのである。このシリーズを通して我々は各関係者と結びつきたい。以下1人ずつ質問をしていきます。

○繊維化学科設立のあらましとその後の講座の設立や現在までの歩んできた道を概ねでもよいから教えてほしい(下川)。

○卒論とは何か？

一回生諸君への解答

4 回生 木下 泰 忠

喜びと期待に胸をふくらませた入学の日から八ヶ月、以来、夏休み・前期試験・球技大会・文化祭・体育祭と一連の行事を終え、一ヶ月后には新年を迎えようとしている。私達四回生にとっては、必然的に、住みなれた学園を離れなければならない淋しい年である。一面においては喜ばしいことなのだが、

漸やく校内の様子や輪郭が判然としてきた今、入学時の期待は何処かに消え、反対に幾許かの空虚感が頭を打って、それが真向コースに表われた不満となったのであろう。一般に“スランプ”という言葉で表現されるものだろう。人間である以上必ずスランプな時期がやってくる。このスランプ期に甘んじることなく、少しでも早く抜け出そうと努力することは良い事であり、それこそ進歩発展がある。現在の自分に満足することなく、常に新しい目標を持って進んでいくことに意義があり、努力に報いられるものだ。現在の自分の位置に満足しきって何事も為そうとしなければ、常に動いている社会から取り残され、やがてその満足が不満に変わった時にはもう手遅れである。手の施しようのない病気となり、ついには自暴自棄に陥ってしまうことだろう。少しオーバーな表現になったかもしれないが、この意味で、諸君が不満を不満として表明し、解決へ努力をしようとしていることは誠に喜ばしいことである。現在、全国で騒がれている大管法がどうだ、米帝国主義がどうだといった問題については別の機会に譲ることにし、真向コースに表われた不満について、私なりの意見を述べるに止めたいと思う。これは、あくまでも私個人の意見であって、他の四回生がどのような意見であるかは私の関与するところではない。別の解答を望むならば、亦別の人に聞いてほしい。

繊維化学科学生でありながら、授業時間の関係上、一・二回生の間は繊維教室に入る時間が少ないということに矛盾を感じているようだ。繊維教室で実験する時間が少ないという理由だけで、縦の連絡が充分うまくいっていないと判断を下すのはあまりにも軽率ではないだろうか。他の大学と比較して満足せよというのではないが、教養と専門に分離してしまっている他の大学に比し、本学のようにクサビ型教育の場合は少しでも恵まれている方ではないだろうか。これについては制度上の問題で私ではどうすることもできない。

現状が現状であるだけに、諸君は、私達上級生を無気力でセクト主義だと断言しているが、勝手に軽率な断定は迷惑千万である。一方的で勝手ないい分かもしれないが、私達には常に卒論実験があり、時間の制限を受ける。一人一人実験の種類が違ふ関係上、全員同じ時間に暇を採るのは少し困難な場合もある。従つて、私達四回生全員が同時に諸君に働きかける代会は当然少なくなる。この点のことは諸君が三回生、四回生へと進むにしたがって理解できるだろう。今は、何を勝手なことを言いやがってと思うかもしれないが、諸君の云分もよくわかるし、私達の云分も聞いてほしい。全体的な代会を持つことが無理ならば、最初は個人的でもいいのではないか、諸君が積極的に研究室にやってきて話しこんでいってもかまわない。お互いに話し合い、親睦をはかる、それから全体的なものへと進んでいく可能性もあることだし。要するに、代会をつかむ努力は、もっと積極的にやらなければいけないと思う。私達をセクト主義だと云つてほしくない。しかし実験室は遊び場所ではないということをお頭においてもらいたい、来るならば時間の許す限り歓迎しよう。

北の光・南の光

3回生 竹西壮一郎

極く狭い僕の至験の範囲内では、今まで最も魅せられたのは北海道の湖と雨よりの尾瀬沼だった。針葉樹の原始林に囲まれてひっそりと静まりかえつているのがいい。

昨年の夏のことである。友人と友人で美幌より阿寒へ抜けるバスに乗った。僅れの摩周湖はやや雲が多かったとはいえずばらしかつた。展望台やバス道路で俗化されてはいるが、スリバチ形の外輪山に囲まれて鈍い金属のようつ、時には液体空気のように冷く光っている湖面は神秘的というにかさねしいものだった。しかしバスが双湖台という展望台についた時はすでに雨の中だった。どんな好奇心から雨を恐れずバスを降りた僕の目に、雨に煙る阿寒の原始林と鈍い灰色の湖面を見せている二つの小さな湖が見えた。パンケトー、パンケトーというアイヌ名をもつ湖の景観からは摩周湖では感じなかつたシヨックを感じた。どす黒い針葉樹の樹海と鉛色の湖面、ただそれだけである。しかしここでは本当の北海道を感じた。暗く圧倒するようなポリウムと不思議に透明で哀愁に満ちた風光、それはシベリウスやグリークの作

岳から受ける感銘とどこか共通なところがあった。これはその後約12kmの大雪山中の原始林中の山歩きと然別湖でもひしひしと感じた。しかしこの北国的な風光の中ではどうしても人間は不純物であるという感じから脱れられなかった。珍しい土地を回ったせい、緊張していたためか、汽車が東京へ着くとほっとしたのを覚えている。

この気分は今夏の夏尾瀬でも味わった。緯度からいえば尾瀬は北国とはいえない。しかし燧岳の頂を隠していた雲を抜けやっと思えば尾瀬沼が見えた時一瞬息をのんだ。この神仙境（今では必ずしもそうとはいえないが）は雨上りの弱い西日を受けて静まりかえっていた。モツ、ツガ、シラビソなどの針葉樹におおわれた周囲の山々とはるかに続く上越、北関東の山々にはアルプスの豪快さはないけれど、すばらしいボリュームがあった。そして焼山峠に向けて針葉樹林にくだり込んでいく大江川湫原の浅線が印象的だった。ここでは遭難できないな、ふとそう思った。人間の不浄な血がここにはかさねられないように思えた。

一方南国の高知へ行った時はそれほどショックなどは感じなかった。足摺岬の断崖も、けわしくそびえ、折重なるように続く四国の山脈も、南国の輝やかな太陽のもとでは、厳しいながらもどこかに心を和らげるような雰囲気を持っていた。そしてここでは人間は日光の中で何の異和感も持たずに、のびのびと行動できるような感じだった。住む人の顔にさえ明るさが多いような気がした。この感じは宇和島で最高潮に達した。すばらしく青い海と空、そして純白の雲と濃緑のミカン畑と明るい黄色の夏ミカン。そこら一面に光がキラキラと輝いているようだった。ショックを受けるとか感激するとかいった生々しい感情はよびおこされなかったかわりに、のどかな明るい気持ちだった。

いささか話は細くなるが、同じようなことは京都へ下宿するようになって以来家へ帰るたびに感じる。十三で阪急京都線から神戸線に東換え西宮北口をすぎるとなんとなく感じがある。夙川をすぎ海が見えはじめるとこの感じは決定的となる。いかに端っただとはいえ瀬戸内海の一部である大阪湾の沿岸には、盆地である京都では感じられない日光の明るさと輝やかしさがある。そんなことはあるまいと思う人があるかも知れないが僕にはそう思える。この明るく輝やかしい日光は人の心を温く包み和やかにする作用がある。

明るく穏やかな陽光を求めるとともに、透明で哀愁を帯びた、神秘的な感じさえする北国の光に魅かれるのも本当の僕である。徳和を求め、一方で未知に憧れるは確におかしな話かも知れない。しかし

一方
運を
とる
の幸
合
て
語
感
ペ
た
へ
さ
で
こ
つ
運
す
こ
三
や
委
会
話
て
一
重
要
を
し
の
さ
い
ます
か
ら
判
つ
こ
も
定
量
と
自
ら
ある

一方が本物で他方がニセ物と断ずることもできないように思う。北方の山や
湖を旅し、南方の明るい高原や海辺で憩うのが理想である。緊張ばかりでは
心身がもたないし、のどかなだけではぼけてしまう。変化を求めるのは人間
の常か、それとも単に何人の特異な性質だろうか。恐らく程度の差こそあれ
全ての人は変化を求めるにちがいない。

私と語学

1 回生 田辺勝利

語学の重要性を今更論ずるまでもありませんが、私は改めてそのことを痛
感させられました。この間、10日某日国連デーのとき、京都市民による市中
パレードがあり、その集合場所である京都市役所の前で、あまたある外人一
人近くに京都ホテルがありますので外人観光客がおりました一の中で、たビー
ン、ポツンと離れて、歩道の側のいちようの木にもたれている外人が目につ
きました。そこで自分の語学力をためす意味からいって好都合であると思つ
て、接してみ、いろいろ話してみたのですが、予想外にもお互いのいうこ
とがよく通じ、彼の言う国際連合における日本の立場の重要性等のことにつ
いてもよく判ったんですが、さて彼が日本の学生のこと、特に、学生運動に
ついて語るや、痛烈な批判を びせられ、日頃から *thinking in English* を
語っていた私はただただうなづくのが精一杯で、何一つそれに対して反駁
する術もなく、ただ単に発音だけに満足していた私は愕然として、いかに彼
のことって、私は同抜けな学生で、己れの立場を弁護しないのだろうかとい
う事をみられ、早々と引き上げようとする態を自分ながら恥かしく思いました。
やはり単に、高校時代の英語の *expression* や *idiom* の棒暗記だけで、日常
英会話にさしさわりがないというだけでは何んの彼にも立たず、語学におい
て、一番大切なのは“思考”即ち“*thinking in English*”ということが一番
重要で「英語が話せる」ということは単に“技術”というもので解決できる
ものだけではなく、常に我々の思考そのものの表現でなくてはならないと思
います。その外人は京都女子大の英文学の教授であることが言葉のはしくれ
から判り、全く日本の学生の思考力の欠除を暴露したみたいなので、今思
つても冷汗が出ます。又いつか、かの人に会う機会があれば、こんどこそは
堂々と自分の意見を述べる積りです。ところで本学には立派な *audio room*
があるように見受けませんが、あれを十分活用したいと思いますが-----。

東海村をたずねて

4 回 生 平 間 敏 郎

11月21日早朝、通勤の人々のまき上げるほこりで霞む上野を発つてゑ時麻、水戸より二駅の東海村へ着いたのは昼に近かった。原子力研究所という近代的な物の出現に幾分とまどつた附近の人達は、思い思いに名物、娯楽施設にと安っぽい色あいを染めている。原子力研究所へバスで15分15回、1分につき1回という高い金を借げもなく払った。研究所の辺りは、数年前は白砂青松の麓そのままであつたろうと思わせるに十分な松と海の香りがあつた。名から推し測つたには余りにも大きい建物である。正門より見たすと、遠景に松をあしらい赤白白赤と大きな建物など点在している。共同研究室を訪れる前に食堂で昼食を取った。実にうまい。どう考えても生協とは段ちがいである。生協と似てるといえば、所員のストに閉してのいごござぐらいなものであつた。飯を喰ひ、茶を飲み、我々のこの二日間の世話をして下さる大学共同研究室に着いたのは12時半頃だつたろうか。昼休みとあつて、研究室の人は外出中であつたので先生一人を留守番に残っていただき、我々若人は早速そこから辺りをうろつき出すことにした。いろいろ研究所の連中がわんざと道に溢れ、テニス、バレー、野球に興じていた。いかにも若々しい。年の頃は皆二十代といったところだろう。「良く学びよく遊べ」という道徳教育の実践はここに見られるの感があつた。今頃学校ではこの人達より若い連中が年寄りじみて水鼻をすすっているかと思うと、ひとりごに笑いが起つて来た。この連中の無鉄砲ぶりも又人を驚かせるに十分である。10米そこそこの直路をへだてて建物が並んでいる内で、バットを振り回して軟式野球に熱中していた。正面入口の厚いガラスに大きな穴があいているのは尤である。原子炉の見学は、相宅先生と千葉先生を残して数人で出掛た。目に見えぬ放射能とやらにびくびくしながらも、ともかく原子炉の近くを歩いた。研究所の方が説明してくれても何がなんだかさっぱり、たとえわかつて今度はその単位の換算をしている最中に次の話しときは、たかが原子力といった甘い気持が一片のごとく飛びさってしまうのはあたりまえである。放射線により変質した物など色々見て、何か口に表わせぬ感動を受けた。その時の生々とした気持を表わすことは出来ない。その夜旅館で書きつけた

覽書の節々にその時の気持が幾分たりとも表われているかもしれない。

11月末日原子力研究所への相宅研究室の一行の一貫のそのまた金魚の糞の如き小生は、太平洋の荒波に接するここ東海村へ着いた。秋とはいえ、風は底びえする夕風を運び、我々一行の気持を心よく引締める効果があった。

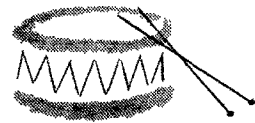
研究所の建物所員を見ていて、学向の発達はかなり勢で進んでいるのではないかと思った。国家のこれに対する期待も並々でないことが予算の端々に見える。原子炉で実験が目的でここまですべてのだが、どうせ来たなら何でも見てやれと片端から片付けることを決心した。

我々の最初から注目していた炉は丁度動いていた。靴を更えて中へ入つていった。我々の日頃よく聞く原子力時代の近づく足音を身近に感じ、現在の化学物理という分類方法にも何か横然とした不安があった。

恐らく化学については何か大きな転換を余儀なくされるであろう。

現在のままであれば世の中から完全にとり残されることは明らかな事である。およそ学向に足を踏み入れたものが、古い枠の中にとどこもり、その範囲で手足を伸ばし、ふんぞり返つたとしても、世の爲にならない学向は成程知識の集積とはなるが、それ自体に役に立っただけだ。言いかえれば役に立たない学向は癩のごときもので、始めはその組織であつてもついには全体を滅ぼしてしまうといったものでないだろうか(後略)。

アメリカの原子力発電所に火がともり 12月2日丁度一年を迎えるが、現在日本も負けず外国の技術を輸入して原子力研究所の隣に建設中である。アメリカを追い越へとばかりの勢いである。現在の原子力のすべての技術が外国製であるが近い将来がならず立派な日本独自の花を咲かせるにちがいない。細かい砂の上に音をたて水まで行く発電所を見るにつけ、工事を急ぐあまりに危険を冒さないことを祈った。ともかく民間産業が乗り出したということはその進歩に1歩にも2歩にも前進を現わしているということである。旅行出発前は何を得ようかと思ひ悩んだが、研究所の門を出た時それがはつきりした。原子力を含めて学向の進歩に必要な考え方をいつたものを何かしら放射線と共にたたき込まれたこの実感である。



パルプ工場から (II)

3 回生 金井政洋

その日の日記を見るとこう書いてあった。-----午後4時13分、石見江津到着。会社から迎えに来て呉れていた。歩いて社宅まで案内してくれる。工場内へ入ってからのの方が遠い。留守番の小母さんが一人いた。工場長用の社宅でいゝ所だ。実習生全部で六人ということで一週前前から東大の農学部の方が三人来ていた。明朝出頭する労務課、附属病院、食堂、浴場などを案内してもらう。通用門の所に来て先輩の中村さんが来る。初めは誰だかわからなかった。寮に連れて行って呉れ話をする。二人は同じ試験課のことするように言っていた。7時になったので堀江迎えに行く。東大の連中に会わせ、飯食いに連れて行く。帰って又二階に上り、こんどは自己紹介する。そして三人で出て行き、映画館の前の喫茶店に入り大羊阪神戦を観る。

弁当の残り食べる。大川も堀江も食べないので丁度三何残っていた卵二階に持って行ってやる。飲まないかと言うので、二人を呼ぶ。皆いゝ調子でバカ話をしている。彼等は皆相当イケルくらでこつちは劣勢だ。皆仲々面白い奴ばかりで楽しい。

蚊帳は大変小さかったが、涼しい風がよく入って来た。星をみつつながら仲々寝つかれない。三人で何やかや話している。12:00-----

さて、翌日は工場案内と見学。時間が余りマーセル化抵抗と硫化抵抗の測定法、やり方など写し、退勤時間の四時になるまで図書室で物色している。ほとんど手をつけられた筆のないような関係のなさそうな本まで沢山あった。それから二日間は器具の準備と試薬の調整に費した。器具の方は必要な物すべて書出し提出、試験課内にはない物は伝票に書き取長さんの印もらって工場内の倉庫に取りに行くのだ。試薬の方も実験計画によって一日の使用量から逆に一週間分位を調整。

NaOH、とに角NaOHを塩酸や硫酸よりも嫌った、二硫化炭素よりも。一回で 85.0g/l を2l, 140g/l を2l, 4% を5l を調整したが、500gの試薬一本半位使った。毎日これらのNaOH 1.5l 使うのであるが、手洗用の希塩酸溶液用意していたわけだが、無残にも僕の可弱い手は毎日毎日NaOHのために犯された。

CS₂の方は高校時代一度手にしたことがあったが、この危険な試薬はそれ以上に丁寧な扱いを受けていたようであつた。その蒸気の特有な臭さは勿論嫌であるがそれよりも嘘か真か真偽の程は怪しいものであつたが笑いながら先輩が口にした忠告の方が気になって、溜下しながら息を止めてまで恒温室から跳出して外気を深呼吸したものだが、時々実験室の中まで亜硫酸ガスの刺激臭が流れて来て、皆急いで窓をしめる事もあり仲々面白い事だ。

蒸水のNa₂SO₄で脱水しなければならぬので毎日10~20ccのCS₂をビスコス室の人に用意してもらつていた。

僕の実験ノート“Voice from Pulp making works”を開いてみると、

7/8(水)曇時々雨

午前中 先ず秤量ビン、グラスフィルター、ピペット、デシケーター etc. を取りに行き、洗滌、必要な物は重クロム硫酸混液に浸す。

午後 与えられた試料の内、バツカイV5を5.5mmに切断。

秤量ビン並びにグラスフィルターの秤量。

明日からいよいよ実験体制に入るべく準備。恒温室の振とう機。

本測定器具に合せず、研究課の方で振とう機使用できる様交渉して戴く。

天秤は勿論自動式直示天秤がずらりとならぬでいる。せめてこんな物一台位学校にも欲しいものだと思つた。毎日約三十回位測定するが、もしこれが化学天秤だけだと思つただけでもぞつとした。

それから純水のかんだんに使えること。イオン交換でどんどん出まってくるのでいくら使つても思いのままだ。

7/9(木)曇

昨日総乾量測定用にとつた秤量ビン乾燥。試薬ビンなど必要な物一切恒温室に移し実験開始。

9:45~10:45 試料パルプ測定容器に入れ、先ず5ccのNaOH加え一様に湿潤させ攪拌棒で長く押しつぶす。さらに残りの45ccを加える。

次にマイクロビューレットでCS₂加える。

10:45~2:45 振とう機にかける、約30分毎に止め手で攪拌。研究課の物速度がゆるく使い物になりそうにないので、部長さんが測定器具に合う台を木工で作ってもらつて来てくれたので、後で振とう機にはめ込めるよう寸法に切る。次の回より使用することにする。

3:20~3:30 先ず遠心分離機で分離。

傾斜法により上澄液流出し、4% NaOH 加えて攪拌、再び遠心機

にかけて洗滌。

3:50~4:40 洗滌操作三回繰返す。

~5:30 次にそれを洗滌ビンでコニカルに流し込み、メチルオレンジを指示薬として3% HCl で中和。すると今まで溶解していたように思われたパルプが綿のように現われて来た。

これをグラスフィルターでろ過し、純水でよく洗滌した後秤量ビンにそのまま入れる → 絶乾

$$MW, SW = \frac{\text{未溶解残渣量}}{\text{Sample pulp 絶乾量}} \times 100(\%)$$

実験と言えばこれだけ。単調と言えば軌道に乗る程増々退屈だ。

午前八時出勤。

十二時前になると六人の実習生は図書室に集まる。すると司書嬢がお茶を運んでくれる。弁当はさすがに皆んな楽しかった。

さて昼休みはバドミントン。午後からは秤量室で秤量で始まる。流れ出る汗、20℃の遊樂室がこの時ばかりは避暑地といえども遠く及ばぬ別天地となる。時々バドミントンをやめて海に出た。チップサイロと貯木場の間のトロツコの線路伝い行き、棉菓子のような泡風船が風が舞う廃液ラビリンス(迷路)を越えるとそこはもう波音も高い日本海が横たわっているのだ。

褐色のパルプ廃液の奔流はドットばかり海中に流れ込み、さらにもう一枚の褐色の帯を海面に広げていた。いくら大きな声を出そうと自分自身にとってこえ聞き取りにくい位なのであるが、それでいて日本海は全く静寂そのものを装っているのだ。

7/22(日)

連休明けの日曜日、今日は全く良い天気である。昨朝三瓶での両模様がうらめしくなる。

昼休み返上して試薬の検定など。

CS₂をマイクロビューレットに満たそうとする時どうしても気泡が入り、弱った。あまり繰返すと早く蒸発してしまうので手際よくやらねばならぬ。

破損器具 三角フラスコ 1。

7/25(水) 快晴

本日も甚だ暑し、熱し。約十度の差のため恒温室から外に出た時は真に不快の感あり。

乾燥釜の温度速く高めようと試み、そのまま忘れ、170°Cまで上

ったとの事。絶乾分は褐色化し、それ故昨日の実験は灰燼に帰す。日々実事多くあるもよし、毎日毎日同じ事の繰返し、少々嫌気がさすぬでもないが、これも創意の源泉とあらば可。常に何事も己の身の為良き事有りと思えば又快。本日より翌日の試料作る。恒温室少々定員過剰の感あり。21.4℃まで上昇。
破損益具 三角フラスコ、5ccメスピペット 各々1

2/26(木) 晴

今日は7月22日に一度やった東北秋田と山陽岩國の結果がわかったがあまりよいものではなかった。10%内外もふれがあるのはひどい。条件を全く同一にすることはとうてい不可能であるゆえあまりいゝ値は期待できないのであるが、再現性についても大いに問題のあることだ。

それ故余程の値が違わないと両者を比較検討するのは少々危険だとも思うが、大体のことはわかりとうである。試料をもっと多くすればふれ(誤差)も少なくなるであろうし、もっと多くの異なる試料で一度に試験した方がよいということは十分予想できる。

何とかかんとか言っている内に二週間も過ぎたようだが、さすがに終りになる程馴れて来て手際よくなりスムーズに事が運んで来るが、その所で実習期間の三週間も終りに近づくというわけである。

少しでも破損した益具は使ってはならないという事一つをとってみても学校と会社とが異なるものであるということがよくわかる。大学と会社のような企業体はその組織も異ったものであるし又根本的な性格も異なるものであるから比較できた代物でもないが、確かに会社には益具が豊富であるという事、ここと学校とは異った点色々と勉強になる、たとえそれがほんの束の間のかま見であるにしても。

「大人になるのか」とに角一考え方が変わって実習から帰って来る」と言われた。

さて本当に面白いのは通用門を出た時からである。今から思うと実習の三週間がまるで矢のように過ぎた感じ。話せば長くなってしまいが小説の種にでもなりそうな事もいくらか、本当に。安来の御多福、ゴリゴリペグ、ビッグプレス、テイザン、今思えばみんな懐かしい思い出となって駈廻るのだ。

さて七月二十、二十一日の祇園祭の連休は三瓶の山パル山の家に行ったが、二十二日には石見益田の大和紡績益田工場の見学に連れて行ってくれた。

1 回 生 コ ー ナ ー

担 当 鷓 野 高 資

。11月22日より7日間我々ノ回生は初の学園祭を経験したのであるが、その記録を述べておく、球技大会はス回生との混成チームで、バレー優勝(工芸との決勝でも優勝した。)サッカー2位、バスケット2位、卓球4位、野球準決勝敗、軟庭ノ回戦敗退という戦果で堂々の総合優勝をし繊維学部自治会杯をえた。文化祭は劇"わしも知らない"を23日に演じて超満員?の観客を前に10月下旬よりキマスト、スタッフはもとより全クラス員の努力の成果を示した。体育祭は天気にもぐまれなかったが、健斗むなしく製糸紡績科に次いで二位となった。雨の中ついで行った仮装行列もFW科に破れ、冬雨も涙にかわった。結果はどうか、劇にしる仮装にしてもクラス全体が一つの目的に結集して全員を仕上げたという点に意義は深かったのではなかろうか。来年こそ頑張ろうぜ。

。以前からノ回生クラス会の設定が云々されてきたが、皆の要求がついに、毎週水曜日の9時半からの1時間に開くことになって早速28日に開かれた。これからの発展が大いに期待されるものである。

。例の11.30統一行動はクラス会の決議、学生大会の決議に従って、一斉授業放棄と府学連集会への単独求心デモが実行された。本学部から70名が参加し、その内我クラスは28人であった。出町柳で工芸の200人と合流し、本年度最高の規模になった。

。冬だ、月曜日の午後4時よりスケートの臨時コースが京都アリーナで行われている。スキー、スケートに大いに若さを発散させよう。

。ドイツ語文法の試験が12月24日ときまった。これから本の方も、英語も告示されるだろうが、全くイブの日にだなんて工繊残酷物語である。

。冬に閉して：12月10日から各教室にストーブが入る様だが、寒さだけが問題でないにしても、近頃特に教室の空席が倍加した様である。

寒さにも負けず、怠けぐせにも負けない強い身体と意志をもって毎日を送ろう。かくいう小生は明日からどうなるかわからない。明日は明日の風が吹く。

。先号のこのコーナーで述べた様に織化教室入口のところに"ひとりごと"と名する落書きノートがすでに設けられた。せいぜい可愛いがって下さい。

文化祭に思う

1 回 生 松 尾 嘉 穂

これから文化祭を見て感じたことを書こうと思ってペンを取る。

22日・前夜祭

4時に蚕バスに乗って工芸学部に向う。(工芸学部へ行くのはこれがはじめてである。)蚕バスは余りゆれないし、なかなか乗り心地がよい。しかし、工芸と繊維がこれだけはなれているのは全く不合理なことである。門を入ると、繊維学部とは雰囲気はかなり違うように思えた。即ち、こちらと比べると、ずっと明かるいような感じがする。これは前夜祭という特殊事情からくるのであろうか？

体育館から見ると南の方に大きな建物(生産機械科の建物だそうである)が出来つつある。繊維学部では、取りこわしはあっても、新築など考えられないことである。これも工芸におられる方の方が実権をもっておられるからだろうか？

5時過ぎまで、モギ店をまわって腹ごしらえをととのえる。この間ビールを飲んだり、球技大会の表彰があったりで、大いに気勢があがる。いよいよファイアーの点火である。電気が消され、暗闇に4人の男がタイムツを持って点火。ああ感激の一瞬である。それから歌を唄ったり、フォークダンスをしたりして時間を過ごす。

————— ○ ○ ○ —————

23日・文化祭Ⅰ

音楽祭があったのだが、小生多忙にて聞くことが出来なかったのは本当に残念である。(言い訳をするつもりはないけれど、学校へは来ていたので)

————— ○ ○ ○ —————

24日・文化祭Ⅱ

講堂でCⅠの劇「わしも知らない」が行なわれたが、僕の見た所では、見物者は殆んど1回生で、2回生はチラホラ、3・4回生は2~3名あつたかどうかという状態である。(尚ほ違ひであれば、オワビします。)自治会の方が「なるべく1回生は講堂演技としてほしい。」とか云われたが、こんな状態ではやる気もしないのではなからうか。せつかく一生懸命やっているのだからもっと見に来てもらいたいものだ。ただ時間がなかつた

というだけでは理由にならないと思う。大体において、自治会自体が学園祭に対して無関心であったようだ、もっと身を入れてやるべきではなからうか。又、一般学生についても、学園祭とはどこかへ遊びに行ったり、旅行したりするために設けてあるのではないと思う。

昼すぎに工芸学部の展示を見に行った。

繊維科の展示・実験などを見ると、わが繊維化学科と殆んど変わらないのではないかと思えるような内容である、3回生位の人が来て説明して下さったが、半ば分ったような、分らないような-----。

建築科の製図展示はやはり専門だけあってなかなか立派なものである。理想的な建物(?)の青写真が並んでいるが、残念ながら日本では当分の間望みではなからうか。

窯業科では、カマと砥石が沢山並べてあるだけで、説明の人もない(1人だけ女の人に説明している人がいたが)ので何が何だかさっぱり分らない。奥の方へ行くと、ガラス棒やルツボなどが沢山置いてある。どれも実験室で不足しているのもらって行こうかとも思ったが、もしも学生の作品であつて実験中にわれたりすると、これこそ語るは涙・聞くは笑の物語になりそうだからやめた。

色染科のローケツ染はどこも大入り荷員の盛況である。(但、そのうち殆んどが女性である)こんなこととわかっていれば、実験衣を持って来て色染の学生のような顔をしてればよかったが、残念無念。

意匠科では玄関にパンフレットが置いてある。横に「どうぞご自由にお取り下さい」と書いた紙がある(こういう場合は、読もうが読まないが、すべてもらうことになっている)ので一冊取って中へ入った。入口近くに紙芝居のようなものがあつた。よく見れば何のことはない平安時代の絵巻物をタテにしただけのシロモノではないか。人間の知恵というものは、この程度しか発展しないものなのであろうか? その横で8ミリ映画を見たが色彩など確かにキレイである。あのやかましい音楽がなければもっとよいがと思った。

生産機械科の展示を見るが出来なかつたが、映画「フレンドシップク」を見た。あのような階段教室があつたらなあと思った。ここでも施設の差を痛感せざるをえない。

工芸はこの位で出ることにする。裏門を出ながら考えたことだが、何故C科展を積極的にやろうとしなかつたのか。これは1回生だから云えるのかも知れないが、C科生は少々気位が高すぎるのではなからうか。あるいは全然やる気がないからつづがしてしまったのか。先生方の都合がよくなつたとか、

期間が短かすぎたとかいろいろ障害はあっただろうが、やはりもっと積極的
的にやる方向にもっていくのが本当ではなかろうか、来年はきっとやろう。
全くえらい勝手な争ばかりいって、気を悪くさせないで下さい。



25日・文化祭Ⅲ

1時すぎ学校に行って、さっそく映画「キューポラのある町」を見た。
日活映画を見るのは、これが生まれてから二本目という勘定になる。講堂
内にはかなり沢山の人が入っていた、外部からもかなり来ているようだ。
もう一本「甘い生活」を見たが残念ながら、僕の浅大な知識では、何を言
わんとしているかということはおろか映画の筋もわからない、これでは全
くどうにもならん。

そろそろアラムでできたので、この辺でやめることにします。

みなさんも考えて下さい

1回生 牧田 輝夫

十二月になり、本日も、もう残り少なくなった。
さて、この誌上を借りて、入学以来約9ヶ月間に、気のついた事や、今考
えている事を、本学園の事を主題として卒直に述べてみよう。みなさんも、よ
く考えてください。

元々文化祭の事から書こう。我々1回生は、文化祭に際して、何らかの参加
をすべく、劇を企画し、クラスを挙げて、演技上の練習や、衣裳、舞台装
置の作成にはげみ、多くの時間と、費用を費した。にもかかわらず当日我々
の劇を見ていた人の数はC生を除くと、十人足らずであった。僕らの後で演
じたSの劇に於ても、似たりよったりであった。僕等の努力の結晶を認めら
れなかったわけだ。しかし僕のいいたい事は、その事ではない。本当の意味
で僕を失望させたのは、あまりに多くの学生が文化祭(学園祭)の意義を無
視しているという事である。明けずっぽうにいえば、学生の大部分は、その
程度には、まだ寝ているか、又は、どこかに遊びに行っていたのであろう。
本学園に於ても同様の現象がみられた。つまり、3,4回生は、殆んど皆無に
等しい状態であった。彼らは、それでも同学園の一員であるといえようか、
三素の授業と、学園内での行事とを、あっさり割り切って行動するのはそれ
五種ではないはずだ。特に今年はC科履も開けなかったぐらいだから、もつ
と違った面で参加できたろうに。ところで上に述べたような状態は毎年繰返

されているのではないだろうか。もしそうだとすれば我々、1 回生こそは、今後そんなムードに宅まれないように、今から肝に銘じておこう。

次に本学園に於る自治活動等について書こう。

本学園が、自治活動等に關して無気力であるという事は、自他共に認めるところであらう。学生大会にしても、いつも、定足数あるかなしを、全くなげかわしい次である。現状を打開する爲には、小さな単位での話し合いを持つ事が何より必要であらう。個人として、そういう事をあまり考える暇のない我々だからこそ、かえって、そのような話し合いを利用すべきだと思ふのである。我々を、技術教育に於る一輛の歯車となる事から守ってくれるのも、そのような話し合いを通じて、自分の位置を確認する事であると思ふ。

1 回生は、その意味で毎週一回クラス討議会を、定期的に行なう事になっているが、それが他のクラスの刺激になって、学園全体が、積極的に話し合いを持つようとするムードに宅まれる事を望むものである。それにはまづ、我々自身の 1 回生クラス討議会が模範的であらねばなるまい。3、4 回生にとっては「本学園生活も残り少ないのだから、今更何も出ままい」という気持もあるが僕が思うに何も自分が在学している内に理想が実現化されないのもいいではないか。学園づくりというものは、長い年月を通してこそつくられるのだから。むしろ上級生の人達は、自分等が理想への道の導火点となり、その達成は、後輩達にまかせて卒業し、卒業後も、あたたかく本学園を見守ってやろうとする気持になつてもらえないものだろうか。本学園は現礎が小さいだけに、かえって、これを理想的なものにする可能性もあると思ふ。

話しは、学生大会の事にもどるが、まず我々は積極的に参加しよう。授業時間をさいてまでやっているのだから、全員が出席するのが当然であらう。又「他人の迷惑になるわけではないんだから、人の事に干渉するな」と思っている人もあらうが、彼等は、出席者達に対して、大きな迷惑を及ぼしているのである。つまり欠席者達の多い事は、大会の気運をつがし、又その大会を、一部の人の意見を反映したものにしてしまうからである。

次に、現在の学生運動、及び現在の大管法反対に關する自治会の運動等について書こう。現在大管法をめぐる、学生の反対運動が連日行なわれている。事實、大部分の学生は、大管法が 制化されるのに反対している。僕自身も然りである。ところが、現在の府学連の行動や、本学園の自治会の方針には少し疑問を持つのである。 というのは、府学連の人々や自治会役員の人達は、手段をよく検討、吟味もせず、実施にうつしていると思われるからである。これは、大部分の学生の怒るところであらう。ジグザムデモを

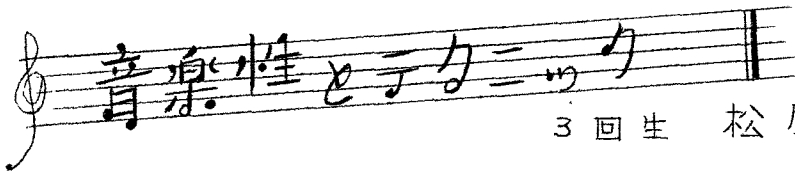
Eこそは、
認めると
全くなげ
合いを持
る暇のな
と思うの
れるのも
思う。
にしてい
し合いを
、我々自
にとって
気持ちあ
いのも
つくられ
となり、
園を見守
現職が小
思う。
。授業時
ろう。又
と思っ
している
の大会を
動等につ
わられて
いる。僕自
合会の方針
会役員の
られるか
ムデモを

まことと、交通上の迷惑をこうむった人は、文句なく反感を抱くであろうし、通行人にとっては、ジグザグデモは、彼等の眼を曇りませるある種の遊戯であろうし、新聞紙上でこの記事を見る人は、「ジグザグデモ対警官」という一つのニュースに着目するだけで、デモの要求していた要項などは、おそらく目につかないだろう。換言すれば、デモはジグザグデモによってマイナスの効用となるだろう。現在のジグザグデモに集まるだけの人数を動員して、幾つかのグループを作り、街頭で「どこがどういけない」という理由で反対するんだと市民に訴えるようなやり方、それこそ本当の意味でのデモニストレーション)或いは、政治家、評論家、教授団、ジャーナリスト関係者等に文書で正式に自分達の見解を述べ、彼等の協力を得るやり方、文署名運動をするやり方、等もっと合法的で有効な手段があるはずだ。京大の大学閉鎖にこそ、もっと教授団、職員、大学院生等のムードが、高まってからやるべきであって、その効果に対しては、僕個人として悲観的である。(執筆しているのは12月4日)と云っても、僕の意見は、現実の大管法阻止に対して何の美観性もないと人は言うだろう。だが僕の云いたいのは学生運動が合法的に、しかも社会から信頼され、しかも社会を誘導するような方向に押し進められる事である。成程、現段階では、一度にそれを望むのも無理だろう。しかし、いつまでも現在の状態が続くようなら、学生運動は、その理論がいかにかましくとも、ナンセンスになるだろう。といっても、僕は、方法自体が悪いから反対運動に加わらないといっているのではない。事実、僕自身11月30日の全国統一行動の日は、授業を放棄し、ジグザグデモにも参加した。方法自体には大変不本意だったがけれども、自分自身として、何とかして大管法反対の意志表示をしたかったからだ。学生の大部分は、少なからず大管法に反対なのだ。方法次第で、彼等を全部立ち上がらせる事も可能なのだ。又その時こそ、学生運動が、学生運動たり得るのである。今後の学生運動の課題はそこにあると思う。しかし、何度もいうように、自分も大管法反対者の一員であるから、自分は自分なりに、反対運動に努力している。

最後に、僕の今まで書いてきたことをまとめよう。

1. 我々は本学園の一員であるから、学園をよりまとまりのあるものにするべきもの(例えば学園祭、クラス討議等)には積極的に参加しよう。
2. 話し合いの場を多くもつ事によって、相互の理解を深め、協同生活の意義を知り、又社会の進歩に遅れないようにしよう。
3. 現今の学生運動を改善し、より底辺のあるものにし、又より底力のあるものにしよう。

いろいろと、訳のわからない事を述べてきましたが、僕の述べてきたことが少しでも皆さんの考える材料になる事を希望しています。



私がここに書こうとしていることが果してこの機関紙の目的に適するかどうかはわかりません。だがとにかく書いてみましょう。

私は音楽以外のことは書けませんし書く気にもなりません。(さあ、音楽の嫌いな人はこれ以上読まずに遠慮なく次の文を読んで下さい)。これから書くのはテクニックと音楽性の問題です。特に「音楽性」と云う何とも云えない怪物について考えてみようと思うのです。

まずテクニックの方は比較的簡単です。要は練習です。時間をかけて何度も何度も同じことをくりかえすうちに段々出来るようになるのです。(少くとも私の場合そうです) だんだん指がなめらかに速く動くようになり難しい曲が出来るようになります。だからテクニックだけを比較するのなら、どの程度の難曲が演奏できるかと云うことで比較できそうです。さてこの次が主題です。このテクニックに音楽性と云うものがからんで来ます。こうなるとちょっとやっかいです。何か樂器を習う時には必ず教則本と云うものが使われます。一番基本のテクニックから順々に難しくなる練習曲が先生から与えられます。ピアノを習っている大ていの人が先ずバイエル、ツェルニー、ソナチネ、ソナタ、と云った道を通ります。フルートならば、ポアルター、巻、ケーラー、ガリボルディ、アンデルセン、ドンジョンと云う一連の教則本があります。ピアノにしろフルートにしろ、他のどんな樂器にしろまず正しく樂符どうり弾くことが要求されます。この樂符どうり弾くこと云うことも実はなかなかやっかいなことなのです。初めのうちはだれでもこれに苦勞するのです。樂符を目を見て、それがどう云う音であるかを知り、その音を出すにはどの指をどこにおろせばよいか、どれだけの長さがあればよいかを考え、その通りのことを指がする。これだけのことを一瞬のうちにに行いすぐに次に移って行くのです。これも一つのテクニックと見なせます。練習をつんで行くとき見た目で指が条件反射的に動いていると云うようになります。勿論一つの曲を何回も練習すればその曲に関して指が動くようになりますが、そう云う練習を何回となくやっているうちに条件反射的に動くようになります。しかし、それだけでは充分ではないのです。何が不足なのでしょうが、

いわゆる
ます。私
思います
む場合を
何も考え
。それだ
。どこで
で読むの
ねばなり
ことです
樂の場合
うことは
るべきか
ればよい
のない事
クセント
なければ
書いてあ
位の速さ
いし遅さ
定づけて
ことにな
色の中にも
にもっと
詩を何度
がつかま
しいものと
なことが
感で何を
と云う能
が欠けても
もそれを正
と云うもの
からないの

いわゆる正しい解釈と云うことです。ではその解釈とは何かと云う事になります。私はよくこの事を説明するために一つのアナロジーを用いて見ようと思います。比較的長い、内容のある詩を他人に聞かせるために声を出して読む場合を考えて下さい。一つの文字は一つの音符に対応するとします。まず何も考えずに棒読みします。これは単に楽符どろりに弾くと云うことです。それだけではその詩の内容を聞き手に正しく理解させることはできません。どこで切るべきか、どこで強く読みどこで弱く読むべきか、どの位の速さで読むのか、どんな感じの声で読めばよいか、と云うことをよく考えて読まねばなりません。音楽でも同じです。どこで切るべきかと云うことは重要なことです。歌の場合には、一応歌詩の意味から正しく切ることができます。楽器の場合、歌と云う助けなしに正しく切らねばなりません。正しく切ると云うことは正しく続けると云うことにもなります。どこで強くしどこで弱くするべきか。これは楽譜にPとかfと云う記号が入ってますしその通り演奏すればよいのですがバッハの作品、或はバッハ以前の作品にはそのような記号のない事がしばしばあります。おかしな強弱をつけることは妙なところにアクセントをおいて詩を読むのと同様です。だから強弱と云うこともよく考えなければなりません。速さと云うことも重要なことです。例えばアレグロと書いてあってもそれは「速い感じ」と云うことを示しているだけです。どの位の速さが最も適しているかは良く考えねばなりません。速すぎてもいけないし遅すぎてもいけない。誠に速さ—テンポ—こそはその曲の性格を決定づけてしまいます。どのような感じの声と云うことは音楽では音色と云うことになります。勿論根本的には美しい音色が要求されますがその美しい音色の中にも又音色の変化が求められるのです。このような事を考えるより先にもっと重要なことがあるのです。又詩の場合について考えこみましょう。詩を何度も読みその詩が何を表わそうとしているのかを先ず読み手である人がつかまなくてははいけないのです。そうでないとその人の読む詩は何か空々しいものとなり聞き手に感銘を与えることはできません。音楽でも同じようなことが云えます。これが音楽性と云われるものだと思います。どう云う感じで何を表現しようとしているのかを掴みとり、それをどうして表わすかと云う能力のことなのです。だから音楽家には音楽性とテクニックのどちらが欠けてもいけないのです。音楽性があり正しく曲を理解することが出来てもそれを正しく表現することが出来なくては何にもなりません。では音楽性と云うものはどうすれば身に備わるのでしょうか。実は私にもその方法がわからないのです。ある程度までは先生によって得られます。まちがった演奏

をしているのを良い先生なら指摘してなおしてくれるでしょう。立派な演奏家の演奏を聞くのもいいことです。特に自分がやっている曲を聞くのは正しい理解をするのに役立ちます。だがこれらは消極的な方法です。自分がそうすべきだと考えるのではなく他から与えられるものだからです。結局音楽性とは才能だと云うことになってしまいます。それならこんな文を読まなくても最初からわかっていた事ですよ。長々と書いたあげくの結論がこんなにわかりきった事になってしまって申し訳ないと思います。(もっとも申し訳ないと思うのは外交辞令でして内心ではこれで良いと思っています。)

現在の疑問

1 回生 鷺野 高 資

時の経過は速いもので、はや入学後最初の正月も背伸びすれば届く範囲にきている。入学当初四半間の安住の地を確保出来たという安心感と共に、化学者への大いなるあこがれをいだきながら織化教室の囲りを何度もまわったり各研究室の状態を尹越したのぞいたり、諸兄姉が、純白とはいえないが、実験衣をきてポリマーブレンドとか“エマルジョン”とか等々言っておるのを耳にして何となく初耳が故か、彼らが想像にも絶する研究をやっているのではないかと思いをし、早く自分も3,4回生になってみたいと純真そのものの感であった。今ではほんのわずかであるが以後知識欲につかされた様に工業全書などを荒破していた結果、高分子物の重合紡糸の用語などはすこし理解し、読むごとに広がっていく、自分のこれから先に広げられた化学の世界の膨大さをはっきりとわかる様になってきた近頃である。行動の面においても孤高の士く勿論なれるわけなどないが)とはならず、自分なりに学内を奔走しているが、学園祭もおわり、重い肩の荷がおりたあとの何となく空虚なむなしさかられた時、時にひしひしと現在の自分の学園生活の疑問が明白になってきたのである。

以下に述べたいが、すべて自分の考えている通り筆であらわされないかもしれないが、筆の走るにまかせてみる。

赤裸々に言えば自分は学向のみに固執して、バリ勉になり良い成績をとり良い会社に入るためにこの4年間をすごすのか、あるいは又広い意味での自治会活動クラスの事学生運動で4年間をすごす道は --- と、即ちこの二者は

両極端を述べた訳だがPH比色色調表に青と赤の間に種々の色があるようにこの間にも色々の妥協まざりあいがある。1回生の間にもこの両極端が何%かずつあり大部分は色調表でしらべる色あいの人である。自分としてはクラス会・学生大会を通して察してきた考えや、正門ピケやデモをもって後者にやゝ傾きかけたという感だが、シュプレヒコールをしながらも自分の行動や思考において確信がないのである。それはやはり根本的にいつて自分の身のかわいさからなるのではないか。他大学工学部系学生の一般的傾向もその考えの要因であるし、先日C科教員にお話をうかがったのであるが、24.5年頃本校の学生が特に学生運動激烈であった頃の指導者や他大学の指導者であった人の其後の身の処し方やそれを契機として某レーヨンの本科採用人数が急に減った事(しかし其後増加の状態にあり37年度は3名になったこの事でうれしいが)、現在の社会情勢における資本家の学生運動家に対する態度をつがさに話してもらいどうか今まで順調に伸びてきたC科の為やあなた自身の為(……)と忠告してもらった事が非常に強く心に残り、又3.4回生が今の自治会活動に反対を示し「あんまりはでなことをせんといてくれ」と言うことからして今我々1.2回生が3年後に就職の問題が身近に迫った時、争をいろいろ考えてみて今の態度を取りうるかどうかという争を想像してみれば、前号(No.13)の3回生根岸君の放言(最初よんだ時は頭にきたが)がいうよう大緊震をすましたあとの手持ちがたさから何かやってやろうということからの英雄思慕があるのかなともおもわれる。こう書いていくと自分を犠牲にしてまでも、弾性のない様な悪気力者に1本のわらでもと真剣にピーアールをし悪大管法を紛砕しておられる執行部の方マヤ、大管法の法制化阻止にどうしても微力でもよいからという気になってきた自分を裏切る様であるが上記のような考えがでてきたのである。とわいても前者のような騒べつされうる行動インポにもなりたくないし、適当に大学生活にバラの花をみいだしたいし、そうかといって後者を全部抹殺するという争も考えられない。学生にはやはり批判精神が欠かせないものである。その精神の発露法を見いだしたいものである。熱血的素朴な正義感が勝ちをせいするか、目光とはいえないが自分の利益のみに執着するか、正に“草枕”の一節情に掉させばながされる、暫に妨げば角がたつ兎角この世は住みにくい的心境だ。以上で完全に考えている様に重がうごいたとも考えられないが一応概略だけはしるしたつもりである。一日以上社会を経験されてきた諸先輩や同輩方はどう考えられるかを聞きたいのである。



3 回 生 竹 西 壮 一 郎

優の数を誇る人間にも
量子力学、高等数学 e π c を算にかける人間にも
クラブ活動、学生運動に没頭する人間にも

私はなり切ることができない
私にはそれだけの強さがない。

真の幸福とは何の関係もない知識をも
政治とイデオロギーをも
人間とその社会をも

私は信ずることができない
私はそれほど素直でない

クラス一番の成績も
華々しい指導者の栄誉も
すばらしい恋人も

私は獲得できない
私はそれほど賢くない。

心に巣食う空しさと
陰鬱な不信感と
どうにもならない敗北感が

私の心の日々の糧
私にはそんなものしかない

空虚の地獄の中で
不信の煉獄の中で
欲求不満の却火の中で

私はただひたすらに待っている。
私を救い上げてくれる一条の蜘蛛の糸を

そしてそんなものはないことを

私にはっきりと、この上なくはっきりと知っている。

(1) ま
皆さん
今あ
は人の常
人の生い
に呼びか
り何らか
他の着た
争柄であ
物事なる
ます。候
するのど
る場合、
です。そ
らないの
つまり
いものな
だが自
し、その
それで

(II) ス
人間た
て他の事
いるので
おこう、
を起しに
ぬ事はス

(III) H
飯をく

我 樂 多

4 回 生 町 研 生

(I) ある事

皆さん

今ある一つの物事があるとして、御存知の様にその物事を判断するのは人の常であり、どの様に判断するかは人それぞれにより又環境によりその人の生い立ちにより違って来ます。そして人は互に啓蒙と云う形で他の者に呼びかけ、話しかけます。勿論の事ながらこの他の者も同じ社会にある限り何らかの判断を下しているのです。しかも往々にしてこの啓蒙なるものは他の者にとって甚だ迷惑である事が多いものです。でもその物事が思考上の事柄である間はまだしも迷惑は少く利益が非常に多いでしょう。だが、その物事なるものが“行動”と云う現象である場合、その判断は迭々複雑となります。例へばある行動を支持はするのですが参加はしないとか又逆に参加はするのですが支持はしないと云う事もよく起る事なのです。従つて啓蒙をする場合、その相手の全ての環境や状態と云うものをよく知らねばならないのです。そして自分勝手な気負込みと云うものはこの上なく注意しなければなりません。

つまり相手は相手なりの判断を下すのであり啓蒙者と云えども左右しがたいものなのです。

だが自分が信じているかぎりその信念を他に啓蒙するべきなのです。がもし、その信念が波にゆられる浮草である場合人はついてこないでしょう。

それでも結果的にはお互に啓蒙された事になるのです。

おわり。

(II) スキ

人間たるもの、とかく物事にとられる傾向がある。ある物事にとられて他の事が頭のすみに追いやられたときいわゆる“スキ”なる現象を起しているのである。例はどこにでもころがっているが例を論を進める事はやめておこう。人は常に心がけ努める事により徐々にではあるがこのスキなる現象を起しにくい精神を作り上げる事が出来るのである。ここで注意せねばならぬ事はスキと精神集中を混同してはならぬと云う事である。

おわり

(III) How to live.

飯をくい、寝てれば確かに我々は生命を保持し得る。そして適当に金があ

り、住む家があれば結婚し、生活出来る。何の不足もなく、趣味とか教養とかいう表面的なものに時間を浪費し、何の厳しさもない、ただ動物的な生活を送る小市民的な人間になりたくない。現実の我々の周囲を見渡してみれば如何に動物的な人間が多い事か、厳しさのない人生ってつまらんものです。

講座回り実験

3回生 有松 利雄

通称「講座回り実験」とは高分子化学実験、化学繊維実験Ⅰ、化学繊維実験Ⅱ、絹糸羊毛化学実験、有機化学実験、化学工学実験の六つのことをいうのである。これは各々町田研、岩崎研、相宅研、貴志研、林屋研、岩崎研が担当しており、時間表のような時間で実験するのではなく、一つの実験室に約一ヶ月ずつ、一軍間で六つを回りおえるのである。これにより各々の実験の一端をでも知り、又各々の研究室を知って行く、二回生の終りにわけたグループごとに各研究室をまわり、えらい迷惑であろうが、色々な器具をつぶし、ぎゃあぎゃあ騒ぎそれでもなにがしかの知識はつけていくのである。

林屋研では色々なものを段階をおって合成するのに対し、貴志研では一つのものについてのみに定性試験、定量試験まで詳しく調べるとか、町田研で封管を使ったりして重合の反応機構を調べ、相宅研ではあるものを相当大量に重合しそれを実際に紡糸してみたりするとか、化工では熱交換とか充填塔とかの実験の *data* をとり数学的な方法を用いてそれをまとめるとか、化繊では実際のパイロットプラントを用いてパルパからヴィスコースレーヨンをつくるとか云えば非常にえがかっこうだろう。実際は化繊で実験がうまいこといかず夜遅くまでやったり、化工で *data* 不足でレポートが書けなくなったり、林屋研ではげしい煙をだして研究室の人をいびきだしたり、町研ではほとんど *data* がとれなかったり、貴志研では最後に収量が少なかったり日数がつまったりで定性試験にバタバタしたりでサンザンである。(相宅研はまだ困らないが期待しています。)

実験というものは時間のかかるもので、講義をさぼって実験しようが、昼休み返上で遅くまで実験しようがつきることはない。うかうかしているとかたわりのつかぬうちに次の研究室へ行く頃になってしまい、いかにレポートをかこうかと苦労することになる。少しでも実験が忙がしい人でええかっこうしようものなら、たちまち1ス回生から3回生は急慢だどどやされる。

しかし
ないと
実験し
てはい
はいか
かわか
ことで

しかし本当に自分の勉強のたりなさを感^じて、もっともつと勉強せねばならないと感^じるようになってくるのはこの頃からではないだろうか。とにかく実験しても理論がわからない、勉強がおつつかない、講義だけをたよりにしてはいけない、自分でどんどん勉強せねばならないと思^ってもなかなかそうはいかない。とにかくビーカーやフラスコをこわしたり、動くのか動かないかわからない様な装置をいじくるのも、時には意気消沈もするが結構楽しいことである。

おかにわ

相宅助教授、教授に昇任

繊維化学科合成繊維講座の相宅省吾助教授は11月1日附で本学教授に昇格されました。先生は大正5年生れ大阪府出身、昭和16年京都大学工学部工業化学科卒業、工学博士。

授業放棄決行す!

大学管理制度改定反対のため自治会執行部の呼びかけに忝^じて去る11月1日全日授業放棄は学生大会に於いても承認され、当日の繊維学部通告にも拘わらず決行された。しかし1・2回生が積極的にデモに参加したりしていたのに比べ、3・4回生は佳境に入った実験の為繊維化学教室は普段と変わらぬ状態だった。

我等かく戦へり

- 今年も又例年の如く球技大会が催され、我科も各種目に活躍した。
- ◎サッカー；1・2回生チームも3・4回生チームも勝ち進み決勝戦で顔を合^わすことになったが、延長の熱戦の末3・4回生チームが優勝を握^りた。尚3・4回生チームは工芸学部の優勝チームをも破^つた。
 - ◎バレー；1・2回生チームが見事なチームワークで優勝し、これも工芸学部の勝者にも勝^つた。
 - ◎卓球；試合前から優勝の呼び声高^かった3・4回生チームは予想通り段違^いの強さを示し卓球はC₂4という例年のジックス通りとなった。
 - ◎バスケット；1・2回生チームは健斗して2位を獲得した。
 - ◎野球・庭球は善戦空しく中盤で姿を消した。

又雨天をついて行なわれた体育祭でも仮装行列の優勝をF.W科に奪

われるという番狂わせ(?)もあった。来年には頑張ろうぜ!!

身にしむ比叡おろし

夏だ暑い、秋だ勉強だ、といっている中にジングルベルの音楽が巻に流れたす候と相成りけり、ノ回生の中には京都を初めて冬を迎えられる人もあろう、京都は全く底冷えのする町ですぞ、金地特有の大陸性気候に加えて比叡山から吹きすさぶ風は身も心も萎縮さすだろう。りの番で一冬過しましたということにならない様に、

この時喜んだのが池のゴイさん、池のベンチにはもはやショウカラ坊主は来なくなったと、水面近くまでスイスイと泳いだり、周囲に気を散らすことなく石垣の岡で時期はぐれの恋をささやき合っている。ゴイさんを放っておいて岡へ帰るのは後髪の引かれる思いがするのやけど忘年会や新年会に誘われて陸へ上ったらあかんで、なあゴイさん。

繊維展開催の動き

昨年好評を博した繊維展を来年やろうという意見が1、2、3回生の間で出て来ている。中心となるべく3回生はこの度いち早くこのことについての意見の交換をした。3回生としてはやろうという意志を殆んど全員がもっていた内容とか規模という点については1、2回生を含めた準備委員会などで検討することになりそうだ。と同時に他学科へも積極的に呼びかけるべきだ。とにかくやるとなれば全員が協力して精一杯のことをすべきである。

ゆく年、くる年に寄せて

人類の平和と繁栄の祈りをこめて明けた1962年もあますところあと十日有余となった。愚案の東西両の歩み寄りも大きくは進展せず、両陣営とも従来の自国の主義を主張したに當り、依然として相互不信の念は薄らぐ、却ってキューバ問題では一時戦争への危殆感をも感じさせた。両陣営主眼はいたづらに自国の目先の利益のみに固執することなく、全世界、全人類の平和、福祉の為に譲歩すべきである。「我々は不完全な世界に住んでおり、不完全な解決でも受け入れるべきだ」という国連事務総長の言葉を関係者はよくかみしめてみる必要がある。年の瀬には毎年「来年こそは」と希望と決意するのが常であるが来年こそは「今年は良き年であった」と思える年にしたいものである。

裏切者

1 回生 大橋 武久

ドイツ語の時間に、聖書をやり出した。そこで新訳聖書のホコリをはたいて、通読してみた。ざっと読んでみてキリスト個人にもキリストを個人として認めるのは我々非キリスト者の特権である。) 興味を引かれたが、さらに強烈に僕の心を引いたのは、あの裏切り者として名高いユダであった。彼は恐らく十二使徒の中で最も最後に名ざされたであろう。ペテロ(シモン)アンデレ、マコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトルメオ、トマス、マタイ、もう一人のマコブとシモン及びタダイの後で。彼の任務はその財政的手腕を買われ、金銭的な面を受け持つことであつたに違いない。彼は何故、終局に裏切りを見せたのか? そういう現実的なオポチュニストでありながら、何故イエスに長い同僚の使徒と共に、従つてきたのか? ここでイエスと、使徒達との将来についての臆測の相違について一言述べておくべきであろう。

ユダのみでなく、他の使徒誰もイエスの現世における成功への強い信仰を持っていたのだ。彼等は光り輝く王座を夢みていたのだ。しかしもちろん、この状態は初歩の段階においてである。「我地に平和を設ぜん為にきたれりと思ふな。平和にあらず、かえつて剣を設ぜんが為なり。」---(マタイ伝)

この言葉がイエスにより発せられた時、他の者はイエスの内にひそむ神性を、描象的にも感じ得たであろう。しかしこのあわれな、現実的な男はイエスの神性よりくるきびしさが故の、憎しみの言葉に存在しうるイエスによる世界の力の征服を夢見たに違いない。すなわちユダは、イエスを宗教者とみなさず、強烈な指導力、吸引力を持つ革命者と見たに相違ない。

ここで使徒以外のユダヤ人達のキリストを見る目はどうであつたろうか? 一部の者を除き、多くのユダヤ人達はローマ人の圧政の下でうめていたが故に、宗教家イエスの中に派生的に宿る強烈な革命家イエスを感じ、もっと楽な社会を望んでいたのではなからうか? しかしイエスの真実の姿が明示された時、彼等は彼の神性の持つきびしさ、権大さにとまどい恐れる。このことをイエスは恐れたが故、初めのうちは使徒にさえも、買的に己の目的を示さなかつたのだ。「汝等は神の國の奧義を知ること許されたれど、外の者はたとえにてせらる。彼等の見てみず、聞きこさくらぬはこの故なり。

」……(ルカ伝) このことはイエスが教えを説いた後、パンを人々のために増やし、与えた時の人々の態度によく現われている。食らい飽きた羊は唯の羊ではなかった。熱烈なイエスの加担者であった。彼等はイエスが王となることを熱望した。ユダにとっては、絶好のチャンスであったに相違ない。しかしイエスは、人々の意外な反応にとまどい、山に逃がれたのであった。イエスの言いたかったのは次の言葉であったのだ。「我は命のパンなり。我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでもかわくことなからん。」彼は遂に仮面をはぎ、その神性を人々の前に表わす。「我肉を食らい、我血を飲む者は我に居り、我も又彼に居る。いける父が我をつかわし、我が父によって生けるごとく、我を食らう者も我によりて生くべし。命のパンを食うものは、とこしえに生きん。」この言葉により彼に従ってきた多くの者がそこで退いた。あの哀れな男、失望させられた男、一杯食わせられた男はユダはその怒りを胸に抱んだ。絶対者イエスはこの瞬間、彼は誰により敵に引き渡されるか知ったのだ。「己を売る者は誰なるかを知り給えるなり」(ヨハネ伝)

この時からイエスと使徒達の逃亡は始まったのだ。説教場には、師に向かつて何も言うべき言葉のみつからぬ戸まどった十二人の男の外には、誰も残っていない。イエスはこの時、神性を超えた人間的な、余りにも人間的な愛情に満ちた詞を発する。「汝等も去らんとするか？」人々に捨てられた神の子の心中はどうであったろうか？しかし熱烈な信仰者ペテロの答えが主を熱める。「主よ、われら誰にゆかん。とこしえの命の言葉は汝にあり。」苦しみにあふれた顔に十一の顔がほほえむ。しかしのこる一人の顔はどうであったろうか？憎しみと怒りのまなざしが、主の心とえぐ、たに相違ない。イエスはつぶやかざるをえない。「我、汝等十二人をえらびしにあらざるや？しかるに汝等の中一人は悪魔なり。」……(ヨハネ伝) ユダにとってはイエスの神性などどうでも良かったのだ。それより派生する強力な力の効果を欲していたのだ。ところがイエスはどう言ったか？「人の子の来れるは、多くの人のあがないとして己が命を与えんためなり。」(マタイ伝)

次にユダがイエスを裏切った直接的な、最も強烈な原因はもう一つあるのだ。弟子達はイエスを強く敬愛していたが為に、彼の愛を各々独占しようとする意識的に又は無意識にあらそったに違いない。他のものはともかく、その合理的な性質を持っていたが故に、財政的な用途のために、もちろんそれだけの理由のみではなかったろうが、弟子の一人に加えられたユダには、イエスの愛は余り強くいきとどかなかつたに違いない。勿論愛そのものであったイエスは、常にこの哀れな男を愛していたであろう。しかしその愛は神が人の

子を愛するきびしい愛であつたであらう。ところがユダは神性など目にとまらぬ合理的な人間であつた。そのため自分が愛されていなかったと常に思いこんでいたに違いない。一方強烈な信仰者であつた他の使徒達とりわけヨハネやペテロ達は、純粹にイエスを神の子として敬愛していたが故、彼の愛を強く感じとつていたのだ。又イエスはそういう彼等を神の子の限界を超え、時には人間的にあたたく愛しもしたのであらう。ユダは十分に主の愛を受けていた他の使徒達を心の底から嫉妬していたに相違ない。合理的に冷く行動していたが故に、常に愛に飢えていた彼は、常に愛に敏感であつた。彼の嫉妬の積みかさなりの爆発は、最後の晩さんの時に起る。この時までユダは將來を見通すのにたけていたこの男はイエスの現世における敗北を見通し、イエスを亡きものとしようと計るパリサイ人やユダヤ教の祭司達と取り引きをしていた。祭司達はまだ熱狂的なイエスの信奉者達が居る人々のごつたがえす、すぎこしの祭のおこなわれているエルサレムでイエスを逮捕するのを恐れていたのだ。彼等はイエスが夜休息する場所を知っているユダと取引をした。ユダは常に勝利者たらんとした。常に強者たらんとした。それが故に彼は現世での勝利を信じイエスに従つてきた。ところが主は既に敗北者となりつつある。このような明白な論理のもとで、パリサイ人達と銀30枚の取引をするのに何のためらいがあらうか？ しかしユダにも良心は存在していた。消えつつとぼしくもえていた。彼はためらつていた。

すぎこしの祭の晩さんにおいてイエスは彼の愛した弟子達とのこれが最後の晩さんであることを知っていた。十一人の純粹な光り輝く魂は彼をなぐさめる。しかし最早イエスは他の一人の魂の奮闘の匂いに堪え得ない。「まことに汝等に告ぐ。汝等の内の一人我を売らん。」(ヨハネ伝)身の毛のよだつような沈黙が暗い玄向を支配する。めいめい自己の良心に向い師に向う。「我なるか？ 断じて我にあらず！」キリストのすぐ左手に座していたユダの声がかかる。「師よ、我なるか？」あゝこの哀れな男の心中はどうであつたらうか？彼はためらい恐れもがいていたのだ。彼の当外れのくやしき。嫉妬、銀30枚、敗北者とはなりたくない。これらが彼の頭の中を混乱させていたのだ。「汝の言えるごとし。」主は彼の秘密を引き渡した。ユダは絶対者の言葉を聞いた。ユダが主の説いたあらゆる教えの中でも、これ程絶対的に信じた言葉はなかつたであらう。もう彼のためらいは消えた。「人の子を売る者はわざわいなるかな。その者は生れざりし方よかりしものを。」(マタイ伝)成程庵は生れなかつた方が良かったといふのか？ 悪い絶望感、憎しみがユダの心をえぐる。イエスの右には最愛の弟子ヨハネが主の肩に親しげに

もたれかかっている。これを見ユダは嫉妬に狂わんばかりであっただろう。ユダは主を愛した。ところが愛されなかった。何という皮肉！主のきびしい愛はこの石のような男をやわらげなかったのだ。主の冷い声が暗い空洞となった彼の心にうつろにひびきわたる。「汝がなすことを速かになせ。」（ヨハネ伝）ユダは立上り、己を尸史に永久に固定する為に祭司のもとに送られたのだ。「ユダ一つよみの食物を受くるや直ちに去る。時は夜なりき。」（ヨハネ伝）彼は自分が尸史に、あのイスカリオテのユダとして、あの裏切り者のユダとして永久に固定されるとは、そこまでキリストを評価していなかっただろう。ところが現在キリスト者の間では、裏切り者といえばユダとすぐ彼がうかんできくように、哀れなこの男は尸史という動かされえぬ巨大なものに固くしばりつけられてしまっているのだ。ここで僕の言いたいことはユダは成る程、悪い奴であつたかもしれぬが、彼に現代人とあまりにも似かような点があるが故に、単純に憎むことが出来ないということなのだ。彼の持っていた、合理性、その計算のたてかたの巧さ、常に勝利者たらんと競う気持、常に自己の利益を計算して行動を決める態度、そして愛を欲していながら常に愛に飢えていたあの哀れな人間ユダは、なんと多くの共通点を我等現代人を持っていることか？ このことは言いかえれば、我等はユダとなりうる要素を非常に多く持っているということなのだ。我等は容易に現代のユダとなりうるのだ。かつ又、既に何と多くのユダが出来上り、公然と行動していることか？ 否！ユダ以下と言わざるを得ぬだろう。ユダの為に弁じておくが、彼は後に赦されたのである。後悔したのである。イエスが殺された瞬間又、あの主に対する熱烈な愛がよみがえつたのだ。「彼はその銀を聖所に投げ捨てて去り、ゆきて自らくびれたり。」（マタイ伝）僕が声を大にして叫びたいのは、我々が現代のユダとなり、現代のパリサイ人、祭司達に利用され、重大なあやまちを犯してはならないということなのだ。ユダとまではいかなくても、もっと容易に我々は、彼等自身の手を汚し、イエスを十字架につけた、ユダヤ人となれるのである。かのピラトが自己の手を汚したくないと、イエスの血につき、我は罪なしと宣言した時の、公衆達の叫び声を決して忘れてはならない。あのようなあやまちをしてはならないのだ。何という恐ろしい叫びであつたらう。これを引用して最後を結ぶことにしよう。

民みな答へて言う「その血は、我らと我らの子孫とに歸すべし」ここにピラト、バラバを彼らに赦し、イエスを十字架につくる為にわたせり、……マタイ伝より。

いつ
我々が
発展の
現在
にも何
一回生
のを南
変い者
の余っ
いるが
機会も
さら好
四回生
ころう
"Ch
りであ
にスム
経験し
つとよ
思う。
回生ま
ばハイ
は月鏡
世話係
でもな
なれば
にもど
クラス



繊維化会の“ファーム”を造ろう

3 回 生 金 井 政 洋

いつものように“Chain”を編集しながらこれだと思った。結局の目指す所我々がお互いよりよく理解し、学園生活をもっと豊かに、そして繊維化学科発展の為にこれはいいものではないだろうかと思った。

現在繊維化学科の卒業生の同窓会として「繊維化会」があるが、在学生の間にも何かこのような物が必要ではないかと思われた。

一回生の間では水曜の空いた一時間を利用して“ホームルーム”のようなものを用き、クラス費として50円集めて運営しているということだがこれは大変い事だと思った。自分達も暫定的にはそのようなものがあり、コンパの時の余ったお金やら又体育祭の時の必要なお金やらはクラス費として管理しているが、“ホームルーム”はなかった。時にはクラス全体でお互いに話をする機会もあったと思うが、いゝものはやはり定期的に持つことができた方がなおさら好ましいだろう。

四回生となると研究室毎に別れるし、グループにわかれると三回生でも全買そろふことは仲々難かしくなる。

“Chain”も学生間の縦のつながりというものを目指して努力して来たつもりであるが、繊維化会の“ファーム”のようなものを造ることができたらはるかにスムーズに運ぶのではないかと思われる。二回生以上は昨年「繊維展」を経験したがあの時程縦のつながりが出来たことはないと思ったが、お互いもっとよく話し合ったり行動を共にする事が出来ればこんなよいことはないと思う。学年毎の“ホームルーム”の他に少なくとも月に一回は一回生から四回生まで集まって“話し合い”をしてもいゝし、或いは気候のよい頃であればハイキングなんかもいゝと思う。そしてこの“ファーム”の運営資金としては月額50円或は100円位集めたクラスに二人位世話係を作り、取買の方からも世話係を送って載せたいと思う。そして退任せられた先生方には名誉顧問にでもなってもらったらどうであろうか。そして“Chain”も名実共に機関紙となればよいと思う。「話し合い」は茶話会になってもいゝと思うし、先生方にもどしどし参加して載せたいと思う。ハイキングなんかもいゝと思うが、クラス対抗でソフトボール大会や卓球大会、その他五目並べでも構わないだ

ろう。そして勝者には何か記念品を渡してはどうだろうか。又新人歓迎コンパや道出しコンパ或はその他の全体が参加できるコンパなどにもうまく運用してはどうだろうか。又体育祭や学園祭の運営などもうまく連絡してもっとスムーズに行きばしないだろうか。

織化会ともうまく連絡をとつたら何かと便利な事があると思う。

クラスから二人位の世話係(学生委員でもよいが)を送んだら簡単な会則でも五つ六つ作り、そして来年四月から実施したいと思うのですがどうでしょうか。その前に会の名称を募集してもよいと思うのです。何かいい案があったら出してほしいと思う。

気のおもむくまゝに

4 回 生 芦 田 孝 雄

白梅町から学校まで徒歩を強いることに決めてから四年経った。

バスで二停留所分ある。

交通頻繁にして活気にあふれた狭い大通り(?)あり、飄々たる単線運転の私鉄あり、静かな小路あり、実にバラエティに富んでいる。ラッシュアワーの市電からはき出されて、ラッシュ気分そのまま、せかせか最短コースを速ぐ日あり、同伸びしたような空っぽの電車を降り、真上からの陽光を浴びながら泰然と道邊を試みる日もある。

しかし、せかせかした足取りの中に又悠然たる歩みの中に、ふと自分と学校とをつき放して考えてみる事が往々ある。否むしろ意識的に考えないようにしていた事柄がふと頭に浮んで来るのがきまってこの道なのである。概して解答を容易に得難い事柄が多い。云ってみればこのまゝ歩いて学校に到れば、それでその事は忘れてしまうというような無責任を伴っているとも言えるかも知れない。事実、学校に乗れば話せる先生方が居られる。愉快な反響でいっぱい。バドミントンが、碁が、そして少しは実験も待っている。来る途中で考えた事など入り込む余地は全然ないのである。

今実験室の窓の前におとなしく座っている。

今日こそは途中で浮んだことを考えて見ようと思う。

「僕は大学で何をしたんだろう」ということである……。

やはり結論など出て来ない。しかし「一つの生き方を体験した」ということ

は事実でありそのことに価値を見出す余裕を持つ程度には成長したらしい。そもそも「大学で何をしたか？」なんてのがおかしいかも知れない。誰だって、何かはして来たのである。何かをしつつ成長して来たんだろう。事実トス回生の頃、同じ道で「大学へ何をしに行っているんか？」と考えた頃より見れば成長していることになるから。

しかしその前にもう一つ考えなければならない事がある。

それは自分がこの四年間大学生であった以上は、一般的な大学生という範疇の中に包含され、従って大学という概念の有する価値の恩恵に自分も浴することが出来るかも知れないということである。

つまり四年間の大学生活に対して、何かはしていたことになるのだけれども、それを確然と把握し兼ねているような一個の学生にも客観的には、ある価値が生じていたのである。

それなら「大学で何をしたか？」という空白窓は一体何に基くものであるか。それはやはり価値を判断する態度の問題であり、極言すれば他人との対比即ち相対的な価値判断に基いていることに依るであろう。

犠牲から生じた結果に対してその持つ世間的な価値を肯定することは非常に危険だと思う。しかし相対的な価値判断によって犠牲であっても、それから脱しようと努力した結果ならばそれはそれで価値を認めてよさそう。即ち自己を欺かずして生じた結果には結果の如何にかかわらず価値があると言いたい。それは絶対的な価値であると言えよう。しかるにこの主観的にならざるを得ない絶対的価値の基準の本質は何かと言うに、これはやはり個人の良識の問題であろう。

どうやら大学生活が個人の良識の話になってしまった。

要は価値を信ずるに、おっくうであってはいけないのだ。

虚無と犠牲とは並行する……

学校への小路は僕に虚無を誘発させたか？

しかし……やはり僕にはゆかしい路だ。

原稿募集

内容…機関紙としての目的に適するものなら何でもよろしい。

形式…自由（原稿用紙には横書きで題字と姓名の欄を五六行とること
締切…1月20日（次号に掲載のため、特に期限はありません）

受付…学生委員又は編集部員（原稿用紙入用の場合には編集部員に）
（なお表紙のデザインも歓迎致します）次号発行予定—2月上旬

Initiation, Propagation, Termination,

4 回 生 岡 田 卓 三

だいが前の事、3ヶ月程前、個人的な用件のため参加出来なかった近体のすぐ後の9月上旬、急に話がまとまって山に登る事になった。

はっきりしたコースもきめずに大阪駅から夜行に乗ってそれからガイドブックを開いて立山の方へ行く事にした。我々のグループは町研のメンバーばかり4人で、山という山は衣笠山からよつとした山位しか登った事のないいわばしろうとである。山をよく知り、山にとりつかれているまじめな方から見れば我々のこの行動は全くふざけていると非難されるかも知れませんね。とにかく山は誰のものでもなく誰でも登れる所である、汽車に乗れば朝には富山駅まで連れてってくれるし、そこに着いた時にはすでにコースは決定して立山三山を縦走して剣ヶ登り一般コースの雷島沢へは下りずに剣ヶの方へ降りる事になった。

9月ともなれば学校も始り街の山男達もほとんど姿も見せず我々の他に23のparty だけで非常に静かであつたので又その上3日間とも天候に恵まれたのでこの上もなく素晴らしい4日間であつた。

富山駅より弥陀ヶ原という所まで電車やケーブル、バスを利用して標高1700mまで登った。それからは親からもらった足本の足で一步一步と入っ子一人いない、ハイマツの豊富な室堂平を通過して、急勾配の一ノ越まで一気に駆け上った。都会の騒音に慣れっこになっている我々にとっては一人一人いない、大きな山々が手の届きそうな所にそびえているそして又真青な空が、ハイマツの緑が——すべての大自然の花の中は我々の別天地のように思われた。

さすがに標高2600~700位になるとセーターにマツケを着ていても京都の真冬のように寒い。この日は雄山のすぐ下になる一ノ越山荘で宿泊する事になった。翌日雄山で日の出を見ようと思って朝早く起き出して一生懸命登ったが頂上までいって見ると太陽は山の稜線をはるか上まで上ってしまっていた。この日も最高の天気だ立山三山——雄山、大汝山、富士の折、真砂岳と歩きに歩いて途中昼食をとりウイスキーをのんで又歩いて歩いて尾根づたいに剣ヶの下までやって来た。

high paceで歩いたので全身汗びっしょりになり誰もいない大自然の中で4人そろって裸になり、自然に帰って剣ヶの道の準備を急いだ。

剣！それはなんと力強く、心地よい響きをもった山名か、又何と風格のある素晴らしい雄姿であるか、山というものの良さが初めて判ったような気のしたのもこの時だった。

剣への *Approach* は意外に長く剣御前、一服剣、前剣となかなかその主峰の剣岳は姿を見せない。前剣を主峰と思って一生懸命登りその向うにまだ剣岳が見えた時には4人とも頭にきてカッカッしていた。

誰もいない山頂でカカンビールかうまかった事よ。

意外に時間がかかったので又日本海の方から雲が湧いて来たのでそうそうに降りる事にして剣山荘でこの日の強行軍（2-3時間歩いた事になる）の疲れをとる。翌日も眠い目をこすりながら剣沢の雪渓をかけ足で降り、阿曾原へ出、そこから関西電力の軌道車で黒部峡谷を眺めながら宇奈月へ出て4日ぶりに街の人々に出会った。

帰途名古屋の友達の下宿に寄り道しそこで彼とこんな話をした。彼は磁磁科の学生で高校時代からの友人であるが彼との会話の中で彼は人間の行動すべて材料力学で説明出来ると言う。そこで私も一歩も退かずに人間の行動すべて化学反応で説明出来る、—— 人間の行動いや人間それ自身にも始めと途中と終りがある。

化学反応（重合反応）に於ても *initiation*, *Propagation*, *Termination* とがある。まずこの *initiation* であるが一般我々の社会ではこの言葉の代りに始め、とか契機とかよく言う。これを我々自身学生にあてはめると私の思うに1,2,3,4 回生と上級生になる程 *initiation* が起りにくくなる。すなわち活性化エネルギーが高くなる。一般に現在の大学教育を眺めて見るとこの活性化エネルギーを高めるための機関である。

1,2 回生の真僕達もそうであったが今の1,2 回生も又この活性化エネルギーが低く、自己触媒的に反応が進み良く言えば政治的、経済的、社会的積勢を含めた自分の周囲に鋭敏であり悪く言えば村和垂動である。

この *initiation*, *Propagation*, *Termination* という化学的な考えを利用して、化学的な物の見方で人間生活を見て行く事は非常に面白い事である。例えば恋愛の場合などは *termination* の最も困難な例の一つである。こういう事は又あらためて別の機会に論じて見たいと思うが、今日の所はハイ、それまで——。

『繊維化学教室の生いたちの記』(前)

岩崎研究室 松本 竜代一

1 序文

今、チエーン編集委員の要望に答え「繊維化学教室の生いたちの記」を苦しかったあの時、楽しかったあの時を思い浮かべつゝ、初冬の夜に拙文を走らすことにした。幸いにも、小生は大学誕生後1年の昭和25年に、当時一次校だった本学に望んで受験し、幸い入学出来て以来ここに10年余、教室の正史を体験した。ここに若干の資料をも持ち合わせているので、大した間違いもせずにペンを運べるものと思うが、中には思い違いも出て来るだろうから、その時には、先生・先輩方より御慮慮のない御忠告を下されば幸甚と思ひます。またある人にとっては、不都合なことも出て来るかも知れませんが、何卒この青二才に免じて御寛容の程、前もつてお断りしておきます。

処で、このような種類の文は、自然と長文になるので、今回と次回のス回に分けて次のような構想によって筆を進めることにした。

- 1) 序文 —— 本文に入る前に一寸お断りを!
- 2) 大学誕生 —— 学制改革の混乱期のけわしかった単科大学への道
- 3) 繊維学部と工学学部 —— 果して犬猿の仲だろうか?
- 4) 中沢前学長 —— 中沢先生の履正と思想と功績と。
- 5) 本教室の木造時代 —— 実験室のマキイモと炎天下のセメントぬり。
- 6) 本教室の改築時代 —— オープン改築を祝ったゼンザイパーティ。
- 7) 本教室の鉄筋時代 —— 完成記念の繊維展。汗と脂を造った中庭。
- 8) 本教室の前身 —— 蚕糸学のための繊維化学だったのか?
- 9) 本教室の同窓会 繊維化会と学部同窓会の衣笠同窓会 —— その間柄は?
- 10) 本教室の教授陣 —— 多士酒々の大恩人たちのプロフィール。
- 11) 本教室の学生気質 —— 今も昔も変わぬ学部のリーダーシップ。
- 12) 本教室の学生運動 —— これもやはり学部のリーダー格。だがそこに。
- 13) 本教室の学園祭 —— 教室の学園祭 = 学部の学園祭の感。
- 14) 本教室の現状 —— やや覇気のうすれて来た現在の教室。
- 15) 本教室の未来図 —— 果してその運命やいかに!?

2. 大学誕生

繊維化学の生いたちを書くにはどうしてもその母体である大学のことから始めなければならない。

そもそも、昭和22〜3年頃のわが教育界には、敗戦処理による世間一般の大混乱と同じように、ここにも一大旋風が渦巻いていた。6・3・3制への改革、男女共学、専門学校の廃止、新制大学の誕生などGHQの日本人教育の大手術が次々に行われ、正に黎明期の大混乱であった。

22年の暮の頃、洛西衣笠山麓の京都繊維専門学校と、洛北松ヶ崎の一角の京都工業専門学校とにもその旋風は吹きすさんでいた。両校とも50年になんなんとする古い伝統ある校史を、いかに進展させるべきか、それが両校の運命を決するだけにその渦中の人々達は、慎重の上にも慎重に、幾たびかの会合を重ねて討議された。当時、全ての専門学校は廃止となり、旧制大学への合併吸収か、単科大学への昇格かの二看一への道を送ばねばならない運命にあった。そして、繊維専門は京都農学部へ、工業専門は同じく京大工学部へとそれぞれ合併吸収されるか、それとも各々別個に単科大学へ昇格か、2〜3校の合併による単科大学への昇格かが、その運命づけられた道標であった。その頃、京大は文三高等学校の廃止にもなって新設を余儀なくされた放養学部のぬぐらを物色中であった。というのは旧三高（現吉田分校——放養学部）だけでは膨張した人数を収容出来なかった。それでまずねらったのが松ヶ崎で、これこそ格好の学舎であった。しかし、当時の教授会は慎重に審議し、かくして名を取らず実を求め単科大学設置へとふみ切ったのである。一方、「繊維」の方は、10数年経った今日でさえもその真相が判明せぬように、当時全くナゾに包まれていたようだ。多分、単科大学に昇格するには貧弱すぎたので、どこからかの誘いの手をじっと待っていたのでなかったらうか。

だが単科大学昇格への道には、一大障害物が長々と横たわっていたのである。即ち、文部省——GHQと撞がった文部省の基本方針には、国立大学は東京を除く他府県では、一府県に一大学というのがあって、京都には当然、旧帝大の京大以外には国立大学が認可されない状態にあった。活発な陳情も、巧妙な工作も全ては、空転に終り、あわやこれまでと思われた。その9回裏死から起死回生のホームランが出たのだから、どんな場合でも最後まで粘り抜かねばならないものである。そのヒーローとは誰か。それは知る人ぞ知る、米軍政部教育課長のE・ケーズ氏、その人である。当時教育界に吹きまわった「ケーズ旋風」の張本人で、そのスゴ腕と豪傑さはその頃の京都教育界で毛虫のように嫌われていたが、GHQでは日本の民主教育の進め方を、

法律家としての彼の行政手腕にある期待をかけていたようだった。京都でのケーズ旋風の一例が、教育の機会均等という基本に基づいた、地域制の実施で、それまでの一中、二中、一商、一工、一師、一女などの名は、空しく吹きとんでしまった。処で、彼の直接の仕事は、小、中学校制度の改革であったのだが、工専との結びつきはまるで行きずりの恋のように偶然であった。

京大との合併を返上した工専の単科大学設立委員会は、その道のすくい手をGHQに求めた。そこで、京都教育界の旋風児ケーズ氏にそのコネを頼み込んだ。委員の熱心さにさすがの猛将も心を動かされ、絶好の切り札を工専の委員会に授けた。それは、何んと「マッカーサーの教育最高顧問W・C・イールズ氏を学校に呼んで直接談判しろ。」ということであった。早速、実施に移ったが、いとも簡単にOKされた。しかし、それにもこりずにある策略をもって再度チャレンジを由込み、まんまと成功してしまった。即ち、23年4月26日工専で、近畿地区の全専門学校関係者へのGHQからの新制大学に関する講習会がそれで、いかにも表面はそうであっても、実は工専とケーズが仕組んだイールズ招聘のための芝居だった。後に、設立委員が文部省へ出向いた時には、既に繊維専門と工芸専門との合併による大学昇格の構想が伏つていた。これによって文部省の一府県一大学の基本線は、脆くもよろめきはじめてたともいわれている。

かくて、両校の合併は順調に話が進み、翌24年5月31日、国立京都工芸繊維大学は、その誕生をみたのである。ここで最後までもたついたのが、今にも不思議な名として残るかの吉田元首相のいった「あの長い名前の大学」その名称であった。「洛陽大学」「西京大学」など数多くの候補が上ったが、工芸的色彩を強く主張する旧工専の立校精神から「工芸」と、案外簡単に決めた「繊維」の名を両立させることになったが、次にどちらを先にするかで一もん着し、結局アルファベット順でも、イロハ順でもアイウエオ順にしても工芸の方が先ということで、「工芸繊維大学」と、いかにも長い名前と相成った次である。そしてやがて、勢力対峙のどちらの学部にも、大学のヘッドというべき本部を置くことは、もめ争の原因になりやすいとの意向から、中岡の地、北野神社前に「本部」が放置され、学長、事務局長ら首脳はそこに席をおかれた。

そうして、7月11日夏の盛りに近い頃、開学式ならびに学部々ノ回入学式が新入生約200名と、学長以下教職員約300名の前で挙行され、事實上大学誕生の第一歩を踏み出した。

3. 繊維学部と工芸学部

そもそも繊維学部として新発足した旧繊維専門学校の前身というのは、明治32年6月に発足した当時の農商務省に属した京都蚕業講習所がそれである。やがて大正3年3月になって官制が改正され、文部省直轄学校としての京都高等蚕業学校、俗にいう「高蚕」となり、昭和6年3月に再び官制改正があって京都高等蚕糸学校と改称されたが、昭和19年4月京都繊維専門学校と改称されるまで養蚕を主体にした、文字どおり蚕の学校であった。そして昭和24年5月大学に昇格するまで、否、それ以後も漸くは養蚕科はいつの時代でもこの学校の主流であった。神代の昔からの養蚕業こそ、最上のものと疑いもなく信じていた人々が多々あった。それが時代の大変革の中に突入して、絹がわが繊維界の王座からずり落ちていたにもかかわらず、そのリバイバルを信じてか、ここでは過去の光輝ある伝統が重んじられ、大きく根を張った養蚕科が巾をきかせていた。いや、現在でも巾をきかせているのである。それが他と比べてなんとなく派手い繊維学部の雰囲気の原因になっているのではなかろうか。その古臭い気風の学部の中に、内外共に近代的な繊維化学教室が建っている。新旧両校舎の対照は、繊維学部の全てを象徴しているといつても過言ではなかろう。大学設立に際して繊維専門の教授会で現在もつともフットライトを浴びているわれらの繊維化学科を潰そうとした動きがあったのである。幸いにも同窓会の有力な援助によって救われ、立派に誕生したが、今から思えば、それら教授会のメンバーよりも同窓会幹部の方がずっと先見の明があったのだから全く皮肉というものである。以来、繊維化学科と養蚕科との関係はまことにもって複雑で、いわばそれは、徳川時代よりの「工」対「農」の宿命的な対立ともいえるのではなかろうか。

一方、工芸学部の方は、その前身を明治35年3月に文部省直轄の学校として設置された京都高等工芸学校にその一歩をみた。当時は左京区吉田にあった校舎も、昭和5年11月現在の地に新築移転した。ここには、皇室と連がった一つの誇りがあって、古い教授連の面でも往時をしのぶ誇り草を聞く。それは、皇室からの特殊工芸品の製造受注で、例えば、照憲皇太后御発注の国産オノ号のクレープデシンもその一つである。そのような皇室との関係の発端は、初代校長中沢若太先生（前学長の父）の何人的な連かりに始まる。先生が東大教授だった時代に官内省御料局の技術を委嘱されておられた。ある時、照憲皇太后から直接にご下向になった「パリ製のクレープデシン」の国産技術による試作をお受けし、全校あげて作りあげて献上したところ大好評を博した。

さて、両学部には大学昇格の時の対等合併などの面子が今にも糸を引いて

いるのか、何かと問題が起きた。その例が、同じ学校でありながら二分されている同窓会、自治会、今年になって行われたが、それまでの別々の学園祭など。また、繊維学部三学科のうち繊維化学と紡績などは、工学部の色染や機械などと内容的に非常に似かよっている点である。かと思うと、物理、化学、数学などの教養基礎科目が工学部ではかなり充実しているのに、繊維学部ではやや軽視されている感がするといった具合で、世間のいう寄り合い世帯のいわゆる「タコ足大学」といつても、その足の数が少いだけではなしに塔好の悪いタコといった状態である。なお、繊維学部の学科内容の不均衡もその一つに入る。工学部の方が、機械、建築、色染、染色、意匠それに今年誕生した生産機械の6学科が各々1から4講座までナンバリングしてまとまった編成であるのに対して、繊維学部では、養蚕8、製糸紡績5、繊維化学4と、全くアンバランスで、それがまた学科内でその特徴を誇張するかのよう何々講座と銘打って、相反目し合っている。入試志願卒の高い学科ほど講座数も教員数も少く、低卒の学科の方がかえって講座数従って教員数が多いというのだから全く変である。まして、入学学生数も定員に満たない養蚕科の学生らは卒論となると、本専の養蚕科を離れ、三々五々あるいは教養の化学講座へ、また、繊維化学のある講座へと出かせぎ?に行く。これは、寛大な気持ちをもてば大いに結構なことであるけれども、それに附随する教員数や、予算面のことなどまで考えれば、大いに考えさせられる。予算配分が助手以上の教官に対しての比率で行われ、学生数などほとんど無視されているようでは、繊維化学科の学生、転員たちの間で歓迎されないのも、現実問題として仕方ないだろう。処で、先の講座数のことにもどるが、この一大原因は、大学昇格の際の教授スタッフを一新した旧工専のドライなやり方に対して、既存教授をどこまでも温存しようとした旧織専のウエットなどというか保守的なやり方が今なお系を引いているといえるのであろう。

政治的手腕家の多い工学部は、昇格当時より続々と学科を増設し、充実しているのに、繊維学部は、岩崎教授らごく一部の人々を除いて全くの保守的というが、退歩的な人々の影響で未だに一つの学科の増設も出来ない。学科数はやがて大学運営の発言数に連なるだけに、いつまでも両学部対等だと思っている人々の前に表われる怪物の出現を何らかの方法で阻止し、かつ、大学全体としては大いに発展させるようしてもらいたいものである。その一案が、学科全体のトレードによる補強であり、あるいはまた、両学部合併による教養学部の新設分離であると思われる。

4、中沢前学長

大学発足と共に学長に就任され、今年5月31日まで3期に亘って12年間の永い間、大学発展のために尽された中沢良夫先生の履正、思想、功績などを綴ってみるとざっと次のようになる。

中沢先生は、学長就任の時に「父の遺産を引継ぐ心境であった」ともらされたのは、先に述べた、先生の父岩太先生が工專の初代校長であったからである。岩太先生は京大の創始者の一人でもあった。彼の功績を讃えるための銅像が現在工芸学部玄関わきに建てられている。そのような父をもつ中沢良夫先生は、明治18年東京に生れられた。三高、東大工学部を卒業され、間もなく九州大学創設の際に、助手や助教授をせず、一挙に教授になられたという、希にみる栄達の直をたどられた。そのため、苦勞知らずの「殿様学者」という風評も流れたらしい。先生の筋を通すという話は有名で、こんなエピソードもある。京大教授時代の門下生の数人の工芸学部教授が学長就任を懇請した処、「工芸学部だけの単科大学々長ならば、父とのつながりがあるから引き受けるが、新大学は繊維学部との合併大学である。だから、工芸学部で推しても繊維学部にも一人でも反対があるなら引き受けるわけには行かない。また、工芸側が繊維側に僕を出すよう示唆を与えてもいけない。」と答えられた。

勲章を受けられたのもつい先日の藍綬褒章だけではない。既に20年程前、京大工学部教授時代に、勲一等瑞宝章を受けられている。先生の父岩太先生もまた、それより前に同じ勲章を受けておられるが、親子二代が生存中に受賞されたという例は全く珍しい。

敗戦の年、昭和20年の初春。東京帝国ホテルの一室では、帝国海軍の誇るトップレベルの技術会議が開かれようとしていた。その席に当時海軍省囑託だった中沢先生も同席されていた。もちろん極秘の会議であったのにこの会場が爆薬をうけた。幸い先生はケガもなく九死に一生を得られたが、その時の回想に「すばらしい連合軍の諜報機密を見直し、戦意を失った。」といっておられたが、しかし唯一つ、今もって確信されているのに「日本の科学、少なくとも化学では連合軍に負けていなかった。」と。

先生は化学者であった。それも電気化学専攻であった。オーストリア大戦時のマツチの原料 $KClO_3$ の電解による製造、オーストリア大戦時の貧乏からの $Fe-Ni$ の抽出、大蔵省技術顧問時代の Ni -貨幣の発案、硫酸化ソーダの国産化、黒鉛電極、電解レンガ、人造ト石、カーボランダム、タンゲステンフィラメントなど数多くの国産化は、いずれも先生の電気化学の理論と応用に基ずいたものである。ここで一見気付くことは、先生の研究が大正戦争のための自給自足に伴う国産化の研究であったことである。そこに強いナショナリズムを感

ずる。もちろん、熱心なヒューマニストであった。先生の最後の研究？は終戦間近かに試作完成した戦争に重大な使命をもつものであったといわれているが、それが何であったかはナゾに包まれたままである。多分、ロケット燃料だったろうと推測されているが、2、3年前、アメリカのガラス繊維業界視察のため渡米されたが、これが唯一の繊維と直接結びついた先生の研究である。敗戦後、ヤー線研究陣から引退されたのはその教えを受けた何千、何万の科学者たちが自分に代って活躍する新時代が来たと信じられたためである。繊維化学教室の岩崎、相宅両教授や、工学部の田中、増尾両教授らは先生の教え子である。

中沢先生は学生運動を堅く禁じられていた。大学は学問を究めると共に、秀れた社会人を国家社会に送り出すという近代的任務があると信じておられた。かって一学生がデモに参加し、ある事件をおこしたが、直ちに停学を命ぜられた。在学中、唯一のことだったが、先生の社会的責任感の表われの一つといえよう。

先生の明治型リベラリスト振りは、時には形式的官僚的になつてかえって逆効果を招いたが、常に、礼節を重んじられ、道徳教育の礼賢者であった。また、共同奉仕の精神を尊ぶライオンズ・クラブの日本代表として大いに活躍されているのも道徳精神を卒先重んじられている一つの証拠といえよう。

先生の顔を下級職員や学生が一番よく見かけたのは、入学式の時でも卒業式の時でもない。それは甲子園球場である。春夏の全国高校野球大会の生みの親として有名な監督褒章を受けられたのはこのためである。野球はレクリエーションのためでない、貴重な団体競技の一つである限り立派な訓育であるというのが先生の野球観である。生来、ひ弱だった先生の少年時代、当時輸入されたばかりの野球によって鍛えられ、人生淘汰の道を知り、成長されたと聞く。三高時代の素手どりの名手中沢良夫と、今もものの本で有名な。高校野球を愛される先生も、プロ野球は大嫌いだそうである。技術が優秀だというだけで、人間的には未熟な高校生のプロ入りには厳しい批判を浴びせられている。最後の先生の野球用語入りの話の一例をあげて、この項を終る。「諸君、フェアプレーの精神を忘れては人生もアウトだよ。エラーのない人間はないが、全力を挙げてプレーしておればそれでよいではないか。諸君頑張りたまえ。」

5. 繊維化学教室の木造時代

大学昇格当時の繊維化学教室は全く身じめであった。それというのも、一度はヤミに焚ってしまおうとされた、いわば不義の子であったからともいえ

る。実験室とはいえば、昔の寄宿舎とその食堂だった木造の小屋で、有機溶剤や、火気など使うのには、気が気ではなかった。まして、応急的に配線された電気や、配管されたガスでは、多くの実験に役立たず、教授自ら、教官、学生らが力を合わせて、手を真黒に汗水流して配線工事や配管工事を行った。それだけではなく、場合によっては新しく入って来た機械(といっても中古品)の土台をつくるのに、炎天下でコンクリートぬりをしたこともあった。もちろん、一寸した器具や機械などはみんなの手で一日中工作室へ入って手細工で作った。それらのリーダーはいつも岩崎教授であった。

当時まだ食糧事情は悪く、ある先生などは、田舎から来ている学生に頼んで買った芋俵一俵を実験に持ち込んで、研究や実験に疲れると、ゴソゴソと俵をあけ、実験室で焼き芋をされた。もちろん、研究室のみんなも時にはお相伴に預った。学生の中には、小まめに乾燥釜で自分のぬり上げたパンを焼くものもいた。だが、みんないざ実験となると希望に胸くくらませ、戦争中にたたきあげられたファイトを丸出しにしてやったようだ。とにかく、みんなが創造の喜びのためか、ガッチリとチームワークよくまとまっていたようだ。そして京大なにぞと貪しい実験設備の中で頑張った。それは丁度、岩崎教授のよくいわれるある「松下村塾」の塾生のような感じだ。

一方、講義の方は、学生の人数の少かったし、スタッフもそれほどそろっていなかった。当初は、オノ回入学生とオス回入学生とが一語に受講したことも少なかった。従って、時間表は空白が多かった。うまく登録すれば廻りに3日登校し、あとはアルバイト出来たこともあった。うまくいった中には入重登録もあった。また授業に一度も出ずに先生の顔も知らず、期末試験だけ受けて単位をとった者もいた。こんなことは今だからいえるのだが、混乱期をうまく利用した頭のよい奴の学生生活の一端である。

木造時代の遺物が今もなお一っだけ残してあるが、それは中庭のコンクリート台である。それは当時の町田研究室の天秤台なのである。丁度、今の池の位置に町田研があり、草むらの中庭を距てて南に岩崎研が、同じく町田研の北側、今のス階建の建っている位置に実験工場があった。その西に貴志研があり(丁度今のス階建の西北部位の所)、その南に学生実験室があつて、その中の小部屋に、丸坊主の海軍の襟っ葉服を着た相宅先生がおられた。またその南の方、今の繊維化学教室の南側に今なお残る小さなス~3段の階段の所に32年頃に現在の位置へ移転されるまでの階段教室があつて、その中の小部屋(今は取り除かれているが、丁度教壇の位置)に後藤先生が電子顕微鏡と共に研究にいそしんでおられた。序に当時の繊維の周辺のことを書く

と、現在の階段教室、食堂・浴面寮などは郵政省の電線置場であった。また、現在の東講義室と繊維本館との間には、蚕糸の標本室が階下に、製図室が上階になっていた、現在の食堂の建物そのまゝそっくりがあった。しかし、今のようなモルタル張りでなく、風の日などよく頭上から壁板が落ちて来たものだった。そしてその南、今の繊維本館の西側の位置に小枝室があつて、その名残りの水道が西側の木造研究室の前に今も残っている。とにかく当時の姿は、現在の学生諸君には一寸想像も出来ないお粗末なものであつた。

次に木造時代の繊維化学科の教官スタッフを紹介すると、岩崎研は、岩崎教授、相宅助教授、原田助手(現高橋)、辻助手(現防犯庁調達本部勤務)の4名、町田研が、町田教授、内野講師→助教授、稲野副手の3名、貴志研が貴志教授、後藤助教授、川口副手の3名、合計10名であつた。その他、化学オ4の浜村研の浜村教授・林屋講師・内藤副手(先輩の藤本研修生)の4名も繊維化を大いに助けられた。岩崎先生は曾つての名声を尊ばれて、大学昇格直前に迎えられた繊維化学科の生みの親であり、育ての親である。また、町田先生も大学設立と共に、旧工専より転居された恩人であり、貴志先生もまた某社の重役の椅子を棄てて母校へ歸つて来られた蚕糸化学の权威である。

学生数はというと、24年7月開校オ1回の入学者は、約30名、翌25年4月のオ2期生以下改築の目処のつく33年入学のオ6期生までは皆30名定員の入学者で、卒業時には脱落者があつて、オ1回の27名、次いで26名、24名25名29名、31名と現在ノ学年の約半数強という状態であつた。それだけにまとまりはよく、各学年とも非常に仲が良く、卒業後もずっと親類ずき合いをしているようなクラスさえある。またある時など、大学全体の硬式野球部内に一悶着が起つてリーグ戦不参の浮き目に遭いかけた時など、主将のクラスの者が彼を助けて学内大会のメンバーがそのピンチを救うために急遽、西京極球場へ出場したこともあつた。当時ス〜3年間学内大会では圧倒的に強かつたクラスだったのでそんな美談もスラスラと出た。繊維化学科オ2期生がそれである。また一方、勉強の方もクラスメート全員が集つて、放課後とか、休日にそれぞれの得手を生かして、共存共栄の美をあげた、決してクラス内で他人を押しつけようなんて羨ましい考えは持たなかつたようだ。オ2回まではオ1次入試生を進んで入つて来た連中が多かつたためか、特によく気が合つていた。それから思うと学生気質も随分変わったものだと思う。

6. 繊維化学教室の改築時代。

やがて27年の夏を迎えた。いよいよオ1期の改築工事が始つた。まずボロ室・研究室の撤去である。各研究室は、押しくらマンジュウのように板住いの場

所を求めて主として化学オ4の実験室へ押しかけた。大部屋は板囲いで区切られてそこに二つの研究室が入った。夏休みの中、思い出のボロ教室はいとも簡単に潰された。そして引続いて鉄筋の教室の工事がその年中行われた。そのオ1期工事の建物が現在の実験工場である。現在の西側は新館2階と連結されたので分らなくなっているが、そこが玄関であつた。完成した時には小さいながらも立派な鉄筋だけに一同大長びで、特に、オ1期生などはあと僅かに残った学生生活のフィナーレを飾るべく大張切りで卒論実験をやった。

もともと鉄筋といつてもブロック造りでなるべく安上りにしようという当局の企画だったのだが、繊維化学科教授らの熱心な陳情で、本格的鉄筋になったという話もある。そのためか、出来上がった実験室内にはガスや水道の元栓は来ていたが、配管してなかった。それでこの工事は当時の卒論生が請け負った。オ1期生は残り少い卒論実験のため漸定工事にとどめ、オ3期生が原田先生を中心に本格的に工事した。しかし、残念ながら本願のようには行かなかったのだ。今でもそのまま残っているように、無ザマにも実験台の上に長々と鉄管をはわした。この実験室は、現在の工作室が岩崎教授室、その西側から順に、卒論生、辻先生、原田先生、相宅先生、そしてまた卒論生と研修生と入った。113号室の大きな電気冷蔵庫は窓枠をはめる前にそこから入れたもので、今取り出すとしたら、解体しなければ仕方のないものだ。

オ1期改築祝賀パーティは岩崎研でゼンザイパーティが行われた。丁度29年の正月を迎えたばかりだったので大盃一杯のゼンザイを前にどの顔も文字どおりニコニコとほころびていた。

そして翌年オ3期工事が現在の北側2階連の階段以東まで行われ、続いて、29年にはオ3期工事が現在の106号・206号の線まで行われ、やっと、町田研も貴志研も新館の方へ帰って来た。それから一年間はある事情で中絶されたが31年に最終の工事が行われ、待望の全館完成と相成った次オである。この時オ1期工事が出来ていた実験工場と本館とが連結されたのである。工事費は各期平均約1000万円、合計約4000万円と聞いている。

放官スタッフにも変動があつて、岩崎研へ後藤先生も来られ、辻先生と代つて渡辺先生(現大和ポリグラス勤務)が入られた。町田研の変動はなかったが、貴志研は、後藤先生が抜けた後、竹井講師(現武内)が、また川口先生の転出後に、別科出の斉藤氏が入られた。化学オ4の方も先輩の研修生らが二三人来られた。その当時の教室の特徴は、先輩が大勢残っていたり、また帰って来ていて彼らも助手並みに大いに後進の指導に当たっていた。実験工場では古い卒業生の田中氏(現守行所勤務)を中心に、小型熔融紡糸機によ

るナイロンテグスが作られていた。これは、アメリカよりの古靴下から再生したナイロン66を使った。現在、化纖Ⅱの実験でしているように、古靴下をアルカリ処理して脱色、洗淨し、50% H₂SO₄で加水分解し、出来たアジピン酸とヘキサメチレンジアミンを精製後、重合して熔融紡糸にかけてテグスを作るのがその目的であった。小実験ではうまくいった研究もパイロットプラントにスケールアップすると次々とトラブルが出て来て関係者は困った。やがて、岩崎先生設計のスクリー式熔融紡糸機が完成し、幾度かの改良を重ねて本格的工業生産の段階へと入って行った。その頃、わが国で一番目の工場だなんてうわさされていた。その原料はデュポン製ナイロン6-10の中古品で某工場より払下げてもらった大きなブロックのナイロン樹脂を電気鋸で細分し、半オートメーション式に熔融紡糸し、延伸、熱処理して、纏にして学部の会計へ納めた。このナイロンは耐寒性のよいものだったのでロープに編んで、かの南極観測隊へ学長を通じて送られた。運動場の東側にある小さな鉄筋の建物内でナイロンフルファッション靴下のノンラン加工の工業化研究が行われていたのもその頃であった。

久 繊維化学教室の鉄筋時代

かくして昭和32年1月、足がけ7年の歳月を費いやして現在の様な白垂の殿堂が内外注目のうちに完成した。そして新築竣工を記念してその年の大学創立記念日5月3日朝より多数の来賓を招いて盛大に催され、午後には、京大の桜田教授の「繊維と高分子の化学」および東洋レーヨンの種村功太郎氏の「最近の化学繊維の飛達」という二つの記念講演会が行なわれた。それと並行して、6月2日までの3日間繊維展が開催された。それより2年前、やっと軌道に乗って来た学部では、完成したての図書館を中心にオノ回の繊維展が行われたが、それはごく小規模なものであった。その聖験を生かしての新築記念のオノ回繊維展は教授以下学生に至るまで全員が一致協力してした甲斐があって大好評を博した。繊維化学科の化纖館のほか、学部内には生糸館、織物館、紡績館、養蚕館、蚕病館、それに即売館などあって、展示、実演および即売が行われ、会期中は連日満員の盛況で、参観者数実に6000人にものぼり、学校や会社その他各種団体も多数あって係員一同嬉しい悲鳴をあげた。まずは大成功だった。

昭和33年4月、待望の新講座が出来、岩研より相宅助教が独立された。定員その他の事情によって職員は相宅先生一人で、正に孤軍奮闘という感であったが、研修生らが大いに手伝いをした。その頃の外来講師には、京大の繊維化学より岡村誠三先生が繊維化学特論を、工業化学より古川淳三先生が

プラスチックを、化研より水渡英二先生、植田夏先生が物理化学を講義に来ておられた。それだけに学生の方も京大の運中に負けてなるものかど大いにファイトを出し、ある時など京大4回生と同じ講義がこちらでは3回生であったが、その同じ問題による試験の結果の平均点が全く同じだったので、講師の先生を驚かし、かつこちらはやを強くしたこともあった。

その頃、このチェーンの前身ともいえる機関誌アタゴが、印刷、製本まで学生や研修生のアルバイトでつくられていた。鏡みにくいガリ版刷りのプリントもお愛敬だった。始めはその頃繊維化学科の学生がほとんどだったスキー・山岳部の雑誌のつもりであったのが、いつの間にか繊維化学科の機関誌になっていった。それらの表紙は仲々変っていて、最初の頃は下手な画がガリ版刷りで画かれていたが、やがて、青写真になり、フロック加工の表紙となった時には、実用新案特許をとろうかなんてまでいわれ大歓迎された。内容の方も、ごくぞつくばらんで、先生の人物評論を映画の題名をもじって書いて、その書き振りの悪さからどなり込まれたり、卒論生の人物評論となると、そのクラスメートがお互に友人批評をして色々と騒いだ。色々な話題を残したアタゴも昭和28〜29年の間2年間だけオム号まで出て編集員の手塚その他からとぞえてしまった。しかし、その後4年経った昭和33年に後輩有志の中からアタゴを復刊しようという声がかかり、現在のチェーンのNo.1が出たのである。

一方、建物は完成したが中庭は草ぼうぼうの荒地であった。オ5回卒業の桜の木約40本の寄贈を機会に、池を造って疲れた研究の休憩所にしようということになり、32年の夏休み前、織化の全員が勤労奉仕して今の池よりはやや大きい目に掘った。オ1号の鯉もその時に放たれた。2年ほど後に防火用水用の池としてコンクリート造りになるまでは、方々から色んな非難があった。33年、34年卒業生のついで約100本が植えられ、35年卒業生の藤棚が出来るようになって、どうやら形も整って来た。現在は、各研究室毎に花壇を受けもち、春に夏にそして秋にと色々な花が咲くようになった。織化南側の桜並木はオ5回卒業生の寄贈記念樹で、植えた当時の貧弱な木々も年々大きく、繊維化学と共に成長して来て、末学する卒業生の楽しみの一つとなっている。池の鯉も年々追加しているのに近所のワンパク小僧どものいたずらでそれほど増えてないが、大きくなって行くのは楽しみである。

(つづく)

編集後記

「こんどはかなりの原稿が集まったな」

「所が大変だったじゃあないか締切りの五日を過ぎて三日間でじつと倍以上にふくれ上がったものだからテンテゴマイだった。」

「何とかして魅力のある物にしようといつも体質改善を叫んでいるが今度はどうだろう。」

「質問—解答、討論—反論とかなりやりとりがあったが。」

「原稿をまわしてすぐに書いて呉れと頼みこんだがどうだっただろう」

「次号まで延ばすと向の扱けたものになるものもあるだろう。こういう風なやりとりはかなり成功しているのではないだろうか」

「一回生の間なんかでは何か学術的な記事が欲しいという希望があるのですが。」

「うん、いつも何か期待しているのだが、この通りだな。」

「これからもっと身近な実験の事で書いてくれて、失敗談なんか役に立つと思うのですが。」

「失敗談か、失敗なんてしたことないからな。---うん、これは冗談」

「一、二回生と三四回生のやりとり仲々激烈を極めるじゃあないか。」

「やはり平素からの話し合いがもっと必要じゃあないかな。」

「言葉遣いなんかひどく乱暴なのがあるな」

「そうだな故意に悪意に感傷的になっているのだろう」

「大体文章を書くということに慣れていないのだろう。原稿の集まり方からみてもわかると思うが、大学入試の必須に作文を入れるべきだと思うがどうだろう。」

「さて、それはどうかな。」

「でも何か書くということにはますます必要な事じゃあないかな。」

「しかし どの角今度はかなり集まったし、充実した事は喜ばしい事じゃあないか。」 「うん、それはそうだ。」

Chain No.14

発行日	昭和37年12月20日
発行者	京都工芸繊維大学繊維化学
印刷	北斗プリント社 TEL⑦0231
編集	繊維化学科 Chain 編集部
編集代表	金井政洋